

令和2年度 長崎県障害者週間作文・ポスター集

出会い、ふれあい、心の輪

—障害のある人とない人との心のふれあい体験を広げよう—



令和2年度 長崎県「障害者週間のポスター」
小学生部門 長崎県知事賞（最優秀賞）

おばまの森放課後等デイサービスそら
矢崎 はるかさんの作品



令和2年度 長崎県「障害者週間のポスター」
中学生部門 長崎県知事賞（最優秀賞）

長崎県立長崎東中学校
門 優帆さんの作品

〈 12月3日～12月9日は障害者週間です 〉

はじめに

国は、「国際障害者デー」である十二月三日から九日までの一週間を「障害者週間」と定め、毎年、この時期を中心に、障害や障害のある人たちへの理解を深め、障害者の自立や社会参加の推進に資するための様々な取り組みを行っています。

「心の輪を広げる体験作文」と「障害者週間のポスター」の募集は、障害者週間の取り組みの一環として、障害のある人への理解促進のために、内閣府と都道府県、指定都市が共催で実施しているものです。

作文は「出会い・ふれあい・心の輪 障害のある人となない人の心のふれあい体験を広げよう」、ポスターは「障害の有無にかかわらず誰もが能力を発揮して安全に安心して生活できる社会の実現」をテーマに募集したところ、多くの方々からご応募をいただき感謝申し上げます。

県では入選作品による「作文・ポスター集」を作成し、素晴らしい作品の数々を県民の皆様にもご紹介しております。

県におきましては、「長崎県障害者基本計画（第四次）」等に基づき、「障害の有無にかかわらず、誰もが住み慣れた地域で、自立した生活を送り、互いに優しく接し合うことができる社会環境の中で、社会を構成する一員として、共に地域を支え合い、あらゆる社会活動に参加することができる平和な共生社会」の実現を目指して、心のかよった施策の推進に努めているところです。

この作文・ポスター集に収められた作品群の持つ思いやりや優しさ、勇気やたくましさ、障害のある人となない人との交流やお互いの理解を深める一助となり、心豊かな共生社会の実現に向けた更なる力となることを確信しています。

令和二年十二月

長崎県福祉保健部長

中 田 勝 己

目次

はじめに

作文

小学生部門

長崎県知事賞（最優秀賞）	諫早市立飯盛東小学校	東川大希	四年	1
みんなの心				
長崎県教育委員会教育長賞				
目が見えない人の一言	長崎南山小学校	廣野愛優瑠	四年	3
長崎県社会福祉協議会会長賞				
車いすバスケット体けんを通して	佐世保市立船越小学校	神品開生	四年	5
長崎県身体障害者福祉協会連合会会長賞				
視覚障がい者体けんを通して	佐世保市立船越小学校	山田夏希	四年	6

中学生部門

長崎県知事賞（最優秀賞）	長崎市立三川中学校	永野百香	三年	7
心のつながり方				
長崎県教育委員会教育長賞				
大切な存在	諫早市立北諫早中学校	高木棕玖	三年	9
長崎県社会福祉協議会会長賞				
私たちにできること	諫早市立北諫早中学校	樽水奏音	二年	11
長崎県身体障害者福祉協会連合会会長賞				
障害者はみんなと変わらない	諫早市立北諫早中学校	松尾すず	二年	12
長崎県手をつなぐ育成会会長賞				
最高のダブルス	長崎市立三川中学校	松永創太郎	三年	14
長崎県知的障がい者福祉協会会長賞				
心のふれ合い	諫早市立北諫早中学校	馬場心美	二年	16
長崎県精神障害者家族連合会会長賞				
障害をもつお兄ちゃん	佐世保市立柚木中学校	小林優乃	一年	18
長崎県精神障害者団体連合会代表賞				
言葉がなくても	長崎県立長崎東中学校	西崎瑠菜	三年	20
長崎県身体障害児者施設協議会会長賞				
心の距離を近づける	佐世保市立柚木中学校	福本優菜	一年	22
佳作				
個性を大切に	長崎市立三川中学校	森山優里	三年	24

高校生・一般部門

長崎県知事賞（最優秀賞）			
個性	長崎県立諫早農業高等学校	山口	二年
長崎県教育委員会教育長賞		山口	二年
障害の形	長崎県立諫早農業高等学校	山口	二年
長崎県社会福祉協議会会長賞		山口	二年
みんな違って、みんないい！	一般	山口	二年
長崎県身体障害者福祉協会連合会会長賞		山口	二年
視覚障害者との交流を通して	長崎県立諫早農業高等学校	山口	二年
長崎県手をつなぐ育成会会長賞		山口	二年
私の生きる糧	一般	山口	二年
長崎県知的障がい者福祉協会会長賞		山口	二年
家族だから、妹だから	長崎県立諫早農業高等学校	山口	二年
長崎県精神障害者家族連合会会長賞		山口	二年
当たり前	長崎県立諫早農業高等学校	山口	二年
長崎県精神障害者団体連合会代表賞		山口	二年
人間らしく生きていく権利	長崎県立諫早農業高等学校	山口	二年
長崎県身体障害児者施設協議会会長賞		山口	二年
たくさんの笑顔に触れて	長崎県立諫早農業高等学校	山口	二年
佳作		山口	二年
今の自分に感謝	一般	山口	二年
佳作		山口	二年
優しさとは	長崎県立諫早農業高等学校	山口	二年

山口 結愛 26

山口 古賀 想 28

山口 下玉利 郁美 30

山口 坂野 美咲 33

山口 草加 和子 35

山口 松本 莉奈 37

山口 江島 志帆 40

山口 東 理奈 43

山口 山口 夢心 45

山口 城谷 てるみ 47

山口 野口 梨央 50

長崎県知事賞（最優秀賞）

みんなの心

諫早市立飯盛東小学校 四年

ひがし
かわ
たい
き
東川大希

ぼくの、お友達には目が見えないお友達や、足の不自由なお友達がいます。

初めて目が見えないお友達が、ぼくに話しかけてきてくれた時、お友達はぼくのことを先生と間違えていて、ぼくはその時、びっくりしました。

その後、みんなでトランプ遊びをしました。

そのトランプは、目が見えない人でもできるトランプでした。

今までぼくは、そんな物がある事も知りませんでした。

ぼくは、お友達がトランプをしている所を見ていて、指先でカードをさわって、文字や数字を読んでいる事が分かりました。

初めは、どんな風にトランプをするのかなと思う気持ちもあったけど、一緒にトランプができて、とても楽しかったです。

目が見えない人は、点字で文字を読む事ができます。

耳が聞こえない人は、手話でお話ができます。

体が不自由な人は、車イスで動く事ができます。

みんな同じです。

なのでぼくは、障害がある人ない人とか関係なく、だれか困っている人がいたら、助ける気持ち、泣いている人がいたら、声をかける気持ちや、人をきずつけない気持ちが大切だと思います。

ぼくは、何度かきずつく言葉を言われた事がありました。

その時、一番仲良しのお友達が優しい言葉をかけてくれて、とてもうれしかったです。

だから、みんなが同じ心で、助け合う気持ちが大切なことだと思います。

長崎県教育委員会教育長賞

目が見えない人の一言

長崎南山小学校 四年

廣野の愛優瑠

わたしは、目が見えない人を見たことがあります。
ある日、下校中帰り道を歩いているときの白じょうをもった人と、その人をささえている人の二人の出来事です。

わたしは、いつも電車を利用しています。そのときに、白じょうをもってふらふら電車から目が見えない人がおりにいくところを見たことがあります。でも、白じょうをもっている人を支えている人は、見たことがありませんでした。

下校中、歩いている目が見えない人のことをすぐに、目が見えない人だと気づきました。それは、道によくあるてんじブロックに、白じょうをあてて歩いている人を見たことがあるからです。ゆうどう者は、目が見

えない人に合わせて、ゆっくり歩いています。そこには、信号がありませんでした。でも車に乗っている運転手さんは、
「おさきにどうぞ。」

と、手まねきをして止まっていました。ゆうどう者が「右」「左」と言っていたすけて心があたたまりました。いっしょにゆっくりわたっていました。わたりきりました。その時に、ゆうどう者の人と目が合いました。

わたしは、
「こんにちは。」
と、言うとゆうどう者も
「こんにちは。」
と、やさしい声でかえしてくれました。でも、目が見

えない人は足を止めて、ゆうどう者に

「だれなの？」
と、言うと、ゆうどう者が

「子どもさんですよ。」
と言っていました。

そしたら、目が見えない人も
「こんにちは。」

と、やさしく言ってくれました。

今まで、直せつ話したことがなかったのに自分から話しかけることができ、うれしかったです。わたしは、ゆうどう者や運転手さんのような思いやりのあるやさしい人になりたいと思います。

長崎県社会福祉協議会会長賞

車いすバスケット体けんを通して

佐世保市立船越小学校 四年

神こう品しな開かい生せい

ぼくは、総合のじゆぎょうで車いすバスケットを体けんしました。

じゆぎょうの中では、車いすバスケットのことを教えて下さる佐世保WBCの馬場さんと、車いすバスケットの仕方を教えてくださる中村さんがいました。馬場さんは、いろいろなことを教えてくださり、中村さんは楽にできる方法などを教えてくださりました。馬場さんは、車いすバスケットは障がいの人しかぼくは入れないと思ったけど、障がいのない人も入れるということを教えてくれました。中村さんは、カーブは曲がりたいところを持っては曲がれるということを教えてくれました。試合をしたときに、かんたんだと思っていただけどあんがいむずかしくて、だけど、みんなでやる

スポーツは楽しかったです。そして最後にしつもんをして終わりました。

気づいたことは、スポーツは、しょうがいのある人もない人もいっしょに楽しめることだと分かりました。

これからはしょうがいの人を助けていきたいと思いません。

長崎県身体障害者福祉協会連合会会長賞

視覚障がい者体けんを通して

佐世保市立船越小学校 四年

山^{やま} 田^だ 夏^{なつ} 希^き

わたしはそう合のじゆぎようで視覚障がい者体けん
をしました。

じゆぎようの中では、アイマスクで歩く体けんを
しました。歩く前は目が見えなくても安心だと思っ
たけど、実さいに歩いてみると友だちにどんな場
所かを教えてもらわないとこわくて歩けなかつた
です。そしてペットボトルの体けんをして、むず
かしかったことはペットボトルの中身はなにが
入っているかを当てることです。目が見えない
と中身が分からないからどうやって当てられ
るのかふくしの人に聞いてみると、ペットボ
トルの形がちがうことが分かりました。でも、
形だけで見分けることができないので視覚障
がい者にとって自動はん売機はやくにたたない
ということが分

かりました。

これからは、障がいのある人もない人も
えがおです。ごすために、障がい者だから
って、さべつやかかわいそうと思わな
いで、楽しい話をしたり、もし町で障
がい者を見かけたら、「大丈夫ですか。」
とやさしく声をかけて、お手伝いが
できる人が多い社会になればいいな
と思いました。

長崎県知事賞（最優秀賞）

心のつながり方

長崎市立三川中学校 三年

ながの 永野 ともも 百香

私は、障害のある人と障害のない人との心のつながりは、とても大切だと思います。

まず、障害のない人が障害のある人を見たら、どう思うでしょうか。最初は、「かわいそう」と思う人が多くいると思います。私も最初は、そう思っていました。私は、生まれつき、足が悪く、そのため二年前に手術をして、三ヶ月ほど入院をしました。術後、リハビリを続けていく中で、だんだんと制限が少なくなり、ベッド生活から車いす生活へと移り変わりました。さらに、外出もしていいことになり、家族と一緒に外出をすることになりました。慣れない車いすでの移動は、車の乗り降りも一苦労でした。そして、家族とショッピングモールに行きました。家族と楽しく買い物をし

ていると、後ろから「かわいそう」という言葉が聞こえました。私は、その時に初めて気づきました。知らない人からの何げない「かわいそう」の言葉がどれだけ人を傷つけるのかを。私は、「かわいそう」と言われた時に「リハビリ頑張ってるのに、なんでそれをかき消してしまうようなことを言うの?」「自分は全然かわいそうと思わないよ。むしろ自分なりに精いっぱい楽しんでるよ」と思いました。自分がなにげなく思っていた「かわいそう」は、こんなに障害のある人を傷つけてしまったのだなと思いました。自分が実際にその立場にならないと分からないことがあることを初めて知りました。それまでの私は、障害のある人を「生まれつきかわいそう。大変だな。」とマイナスな方

向でしか見れていませんでした。でも、いざ自分がその立場になってみると、「かわいそう」ではなく、「すごいな。」「自分も頑張らなきゃ。」などと、見た人が励まされたり、プラスに考えてもらえたりすると障害のある人も、うれしいのではないかなと思いました。私はそれからテレビを通してではなく、普段の生活でも障害のある人達を見る目が変わりました。自分も一人の障害者として「頑張っていてすごいな。尊敬するな。」と思うようになりました。私は、実際自分が入院していた中で、同じように障害を持った方にくさん出会いました。その中には、小さい子では三歳の子もいました。自分と同じ学年の子もいたり、他の階にはお年寄りの方もいました。私は、その時に「みんな頑張ってるな。自分だけではないのだな。」と勇気をもたらすことができました。みんな明るく、元気で、優しい人達ばかりです。すごいなと思いました。

私は、これから、障害のある人に出会ったら、「すごいな。」と心で思っているだけでは思いがあまり伝わらないので、何か困っていたら自分から進んで助けあげようと思いました。私はこの経験を通して、障害者の人達の気持ちが分かっただけでなく、その時に周りにいてくれた人達へのありがたみをすごく感じま

した。常に寄りそってくれた家族、手術をしてくださった医師の方、術後、きつい時もいつでも体調を気づかってくださった看護師の方々、退院へ向けてリハビリを毎日してくださったりハビリの先生、励ましてくれた友達、先生など全ての人達に対して感謝の気持ちでいっぱいでした。これからは私は、今まで以上に障害のある人達と心をつなぐために、少しでも困っている人がいたら率先して助けることを特に大切にしていきたいと思えます。さらに、周りの人へ感謝の気持ちを持って接し、自分も感謝される人になりたいです。

長崎県教育委員会教育長賞

大切な存在

諫早市立北諫早中学校 三年

高木 椋 玖

新型コロナウイルスは、私たちから多くの自由と楽しみを奪った。私にとって最もつらかったことは、施設にいる障害を持った妹との面会が禁止されたことだ。面会できないと聞いた時は、とても悲しく寂しく、今すぐにも会いに行きたいという気持ちでいっぱいになった。そして、自分にとって妹がどれだけ大切な存在なのか痛感した。

私には、障害を持って生まれてきた八歳下の妹がいる。母のお腹の中にいる時から障害があることが判明していて、両親は医者から「生まれてきても、長くは生きられない。」と言われていたそう。当時、私は小学二年生、弟は小学生にもなっていなかった。まだ幼かった私たちに、両親は妹のことを詳しくは話さず、

ただ病気であるということだけを伝えた。妹は、すぐ保育器に入ったので、親以外の私たちは、年に一回しか会えなかった。

妹の病気は、全国で推定百人程度で、無事生まれても早期に亡くなることが多いとされている。妹の場合、呼吸ができないので、喉に穴を開ける気管切開をし、肺に酸素がいくようにしている。

そのため、ご飯を口から食べることができないので、味や食感、においがわからない。生クリームや綿菓子など、口に入れてすぐに溶ける物しか食べることができない。声も出せないし、私たちのように、自由に歩いたり動いたり、外で遊んだりすることももちろんできない。私は妹の声を聞いてみたい、おいしいものを

食べさせてあげたい、走り回らせたいと思う。でもそれは、頑張っている妹に失礼なことなのかもしれない。妹は与えられた条件の中で一生懸命生きていて、私よりもずっと強い心を持っている。一回心臓が止まってしまった時に、お母さんが声をかけると、心臓が動き始めたことがあったそう。人間の生命力のすごさを妹に教えられた。

私は、疲れた時や落ち込んでいる時に妹に会うと、家に帰る頃には、何も思っていなかったかのように心が軽くなる。妹の額をなでると、口角が上に向く。なでるのをやめると、少しずつ口角が下に下がっていく。私はこの瞬間が大好きで、毎回帰る予定の時間を大幅に過ぎてしまう。妹に会うと元気がでて、頑張る意欲がわいてくる。それなのに会えない。妹が元気の源だったんだと改めて気づいている。

そして今、施設で働いている方たちにも感謝している。「もし、自分が感染したら」「施設に感染が広がったら。」という大きな不安があるだろう。それでも、感染予防を徹底しながら、一人一人に真剣に優しく向き合ってください。心から尊敬しているし、利用者やその家族にとって、とても大切な存在であることを再確認した。

私は将来、障害のある方たちに関わる仕事をしたいと考えている。障害のある方に希望を与えたい、やりたいことを全力でサポートしたい、「障害者だから、」と思っただけほしくない。そのためにも、障害のある方、その家族の方とも多くふれあい、安心して過ごせる環境をつくる手助けをしたい。そして、私も、誰かにとってかけがえのない大切な存在だと思ってもらえるよう成長していきたい。

長崎県社会福祉協議会会長賞

私たちにできること

諫早市立北諫早中学校 二年

樽たる 水みず 奏か 音のん

私は「なぜ、障害者を差別するのだろう」と思うことがあります。私も最初は障害についてよくわからなかったけれど、学校生活や普段の生活などで学ぶことができました。

私は、小学生のとき障害者がいることも知らなかったし、意味もわかっていませんでした。しかし、小学校中学年のときにある本に出会いました。その本は、障害者のことについてわかりやすく描かれたものでした。その本の主人公の男の子はたくさんの人に差別され、ひどい言葉を何回も言われていて、読んでいると、とても心が苦しくなりました。もし、私がその男の子の家族や友達だとすると、とても悲しいし、心が痛みます。たくさんの人に障害者のことをしっかり理解し

てもらい、誰もが幸せな暮らしができるようになってほしいと思いました。

私の学校にも病気をもった子がいますが、みんなで助けあったり、教えたりしています。ただ教えるだけじゃなく、一緒に活動し、ゆったり、わかりやすく教えることでその子達が安心できるかなと思いました。

この世の中にはたくさんの方がいて、私も世界中のみんなも一生懸命、今を生きています。そう考えるとみんな同じ人間です。そのため、けっして差別はしてはなりません。人はみんな、笑い合ったり、泣き合ったりできるので、私はそんな世界を作っていきたいです。

長崎県身体障害者福祉協会連合会会長賞

障害者はみんなと変わらない

諫早市立北諫早中学校 二年

まつお
松尾 すすず

私のおばあちゃんは酸素ポンベをつけていないと生活ができない。しかし酸素ポンベをつけていると、みんなと変わらない生活が送れる。

おばあちゃんは、私が小学校五年生の時に、病気で長期入院をした。その時に、酸素ポンベがないとだめになってしまった。現在、私とおばあちゃんは前と変わらない生活を送っている。しかし酸素ポンベを持っているので、みんなより幅をとってしまうこともある。それは仕方ないことであり、まったく悪いことではない。それを「じゃま」などと言う人は、私は許さない。おばあちゃんもつけたくてつけたわけではないので、そのようなことは言わないでほしい。

私も将来つけることになれば、そんなひどい言葉を

言われたら心が痛む。それは、みんなが思っていることだと私は思う。なので、酸素ポンベを持っていて「じゃま」だとかひどいことは言わないでほしい。おばあちゃんからしたら、おばあちゃんと酸素ポンベで一人なのだ。

私がおばあちゃんと買い物をしている時に一度おばあちゃんを冷たい視線で見ている人がいた。私は正直そんな視線をおばあちゃんに向けてほしくなかったので、少しムカツとした。

酸素ポンベをつけているだけでみんなと変わらないのだから、冷たい視線を向けなくてもいいと思う。誰でも冷たい視線を向けられたらいやだということは変わらない。自分がされていやなことは人にもしないで

その人のことを分かってあげることが大切だと思う。

これからは、私も自分の行動には責任をもち、その人のことを考え分かってあげられる人になりたい。

みなさんも、障害者だからといって違うあつかいをせずその人のことを分かってあげるようにしよう。

長崎県手をつなぐ育成会会長賞

最高のダブルス

長崎市立三川中学校 三年

松 まつ 永 なが 創太郎 そうたろう

私には学習障害を持った友人がいます。彼とは小学校からの同級生で、のんびりとしたマイペースな性格です。勉強は大の苦手で、宿題はあまりせず、授業中も居眠りをする事が多く、よく注意されていました。そんな彼ですが、小学校の頃から落ち込まずに元気で、冗談を言っ人々を笑わせるほど楽天的でした。

彼と私は中学生になると共に卓球部に入部しました。打ち方やフォーム、ルールなどをコーチなどから教わったのですが当初、私は「彼はなかなか覚えられないのでは。」と少し心配していました。しかし、彼は難なく教えられたことを覚えていき、卓球部の一年生内でなんとトップに立ったのです。各大会でも一年生ながら上位の成績を残し、コーチや保護者、部員か

らも期待されていました。

けれども、二年生になるとシングルでは伸び悩み、私は彼とダブルスを組むこととなりました。ダブルスでは意思の疎通とパートナーへの思いやりが重要です。パートナーが打ちやすいボールになるよう考えて動かなければ、動きが乱れ、たちまちボールをつなげられなくなります。試合で失点したり、相手にリードされた時、「次はここを直そう。」と、私は彼に言うのですが、彼は「はいはい、分かっているから。」とか「いちいち言わなくていいから。」とあまり聞く耳を持つうとしました。他の人から言われても不服そうな顔で、アドバイスを受け入れているようには見えませんでした。私は彼が自分のミスの原因や弱点を改善

しようとしているとは思いませんでした。私は試合に負けると「彼のせいだ」と思ってしまう、ぶつかってしまうこともしばしばありました。

三年生になると中総体へ向けて練習はより一層厳しくなりました。練習試合も増え、その中で彼とダブルスを組んで他校と何度か対戦しました。二人でしっかりコミュニケーションをとって何とか勝つことはできましたが、ミスを修正できず、納得のいくプレーはできませんでした。試合後、彼と話しましたがいつもどおりの反応でした。中総体本番まであと少しという場面だっただけに私は不安が募るばかりでした。

そして、迎えた本番当日。私と彼は団体戦二試合目にダブルスとして出場しました。自分達が目指しているベスト四のためには負けられない試合です。ゲーム目は取るも、二ゲーム目は緊張とあせりからか彼はチャンスボールを何本も外してしまい、二ゲーム目を落としてしまいました。休憩中に「力を抜いてコートにボールを入れることだけに集中して。」と、私は彼に言いました。彼は返事はしてくれましたが、同じミスを繰り返していました。なんとか三ゲーム目はとりましたが、続く四ゲーム目。ミスを繰り返す彼へのイライラと勝利へのあせりで今度は私がミスを連発し

てしまい、大きく点差が開いてしまいました。その時、落ち込みかけていた私に彼が「大丈夫。後ろには僕がいるから。」と励ましてくれたのです。いつも支える側だった私にとって支えられることは新鮮に感じ、とても心に響き、勇気づけられました。ここから先は迷わずに自信を持ってボールを打つことができるようになります。最後は彼としっかり息を合わせてプレーでき、見事勝利することができました。ピンチの際の彼の励ましの言葉が私を救い、勝利へと導いてくれたのです。これまで、どちらかと言えば彼を支える側だったはずの私はいつの間にか彼に支えられていたのです。

その後、自チームの他の選手が負けてしまいチームも敗北。私たちの夏は終わりました。私と彼は当初からぶつかって、すれ違い、試合に負けてばかりでしたが、最後には互いを理解し、勝利以上の大きなものを得ることができました。私は彼とダブルスを組めてとても嬉しかったです。

長崎県知的障がい者福祉協会会長賞

心のふれ合い

諫早市立北諫早中学校 二年

馬場心美

私が小学六年生の時、同じクラスに一人のダウン症の女の子がいた。その子は、個性豊かでも面白くてクラスのムードメーカー的な存在だった。

昼休みや休み時間は、よく遊んだり話したりしていた。その子はいつも笑顔だった。一緒にいると心がおちついて毎日の学校生活が楽しかった。修学旅行も同じ班と一緒に活動した。班を盛り上げてくれた。本当に楽しかった。その子がダメなことをすると強くおこるのではなく、笑顔で優しく注意をしていた。しかし、中にはからかったりいじめたりする人もいた。私はかわいそうな人だなと思った。そんなことしかできないのかと。

私たちは、みんな同じ人間、仲間。バカにするよう

なことは、絶対許せない。みんな一生懸命生きているのにと私は思う。もし、自分がされたらどう思うかを考えることが大切である。その子だって、私たちだって、長所や短所がある。それを分かり合っていくべきだ。その子は、自分が思うようにできないかもしれない。しかし、それを悪くみるのではなく、笑顔で支えることが大事だ。そのためには、個性をしっかり認め合い、どんな人でも平等に接していくことが大切だと思う。

障がいのある人とならない人では、思いが通じないこともあるだろう。しかし、それを私たちがしっかり向き合って、通じあわせなければならぬ。障がいのある人とふれ合うことでいろんなことを学んだ。私はこれ

からも障がいのある人を差別するのではなく、平等に接していくべきだと思った。

長崎県精神障害者家族連合会会長賞

障害をもつお兄ちゃん

佐世保市立柚木中学校 一年

小林優乃

私には、二つ上のお兄ちゃんがいます。お兄ちゃんは、ダウン症という知的障害と聴覚障害をもっています。

ダウン症は、赤ちゃん千人に一人がダウン症でめずらしい障害ではありません。外見から見るとダウン症の人は他の人と顔つきが少し違っていて、鼻が低めで両目の間が広めです。ですからダウン症の人は顔つきが似ています。ダウン症の人は、話し方ではなく話すこと自体がうまくいかないことがあります。私のお兄ちゃんは、耳が聴こえないこともあってうまく話すことができません。でも今はお母さんや私や家族を呼ぶことが上手にできています。一人でしゃべっているときは、「あ〜あう〜」と言っていますが、物を覚える

ことやお手伝い、お絵かきが得意です。よく私の勉強したノートに、えんぴつやボールペンで花丸をかいて笑っています。

特別支援学校には、知的障害のある人のための学校や手足が不自由な人のための学校があります。それぞれに小学部・中学部・高等部があります。

本当は、自分の家の近くの学校に通って、その学校で一人一人に応じた指導がしてもらえれば理想ですが、実際には難しいために遠くの特別支援学校に通うこととなります。障害がある人は通学が大変なだけでなく、学校に通っていると近くの人との交流が少なくなったり、クラスメイトが少ないため遊ぶ人が少なくなったりします。そこで交流会を行います。交流会と

は、特別支援学校に通っている人が、朝の会やある教科、給食などを一緒に活動することです。

私の家の近くに、長崎県立ろう学校佐世保分校という学校があります。お兄ちゃんも以前、小学四年生までこの学校に通っていて、私はまだお兄ちゃんと同じ小学生の時、交流会で柚木小学校に来ていました。その時は、お楽しみ会や平和集会などで交流を重ねていました。

小さいころから小学校・中学校で交流を重ねれば、障害を持っているお兄ちゃん存在や性格を理解してくれます。近所を散歩して「けんし君!」と声をかけられると嬉しいです。

小学生のころにお母さんから「お兄ちゃんは、障害で今はこんな風な状態なんだよ。」と言われたことはありますが、その時はまだ理解できなくて、外に出るたびに、そして大勢いるイベントやお祭りに行くたびに、いろんな人から変な目で見られて、お兄ちゃんと一緒にいけば、その家族まで一緒に見られて、「何でこっ

ちを見てくるの?」「お兄ちゃんのせいで!」と、外に出るたびにそう思っていました。そして「なんでよりによって私のお兄ちゃんがこんな思いをしなきゃいけないの?」と思っていたら、いろんな感情がこみ上げてきました。悲しさや悔しさ。でも、そう思えばお兄ちゃんを産んだお母さんもまわりの家族もそう思っていたことがあったかもしれません。

だから、私は学校での交流会は大切だと思います。

長崎県精神障害者団体連合会代表賞

言葉がなくても

長崎県立長崎東中学校 三年

にし ざき る な
西崎 瑠菜

人と人がコミュニケーションをとる方法。そのように考えた時にまず私が思いつくことは言葉を交わすことだ。初対面の人と話すことは、私にとって簡単なことではないが、勇気をもって声をかけることで打ち解けることができた。だから、「言葉」というものは、とても大切に必要不可欠なものだと思う。しかし、私が小学生のころには「言葉」ではなく、別の方法でコミュニケーションをとっている一人の男の子がいた。その男の子と出会ったのは、小学校二年生の始業式の日だった。新しいクラスになり、周りには話したとすらない人ばかりでソワソワとしていた。その時に近くの席にすわっていたのがその男の子だ。先生が付き添っていたため、障害をもっているのだと分かった。

その男の子は、特別支援学級に通っていて、総合などの時間だけクラスと一緒に活動をする男の子だった。初めて同じクラスになったので声をかけてみたが、目は合っていないも、言葉を返してもらえなかった。当時二年生だった私は不思議に思い、言葉を返してもらえないことに不安を感じていると、付き添いの先生から普段から小さい声でしか話せず、生徒たちに対しては恥ずかしくて、ほとんど話すことができないことを教えていただいた。不安だった私はこのことを聞いて、とても安心した。しかし、小学二年生のころはどのようにコミュニケーションをとったらよいのかが思い浮かばず、あまり話さないまま小学三年生になり、またその男の子と同じクラスになった。その男の子とは、

そのまま小学六年生まで同じクラスで過ごした。三年生のとき、その男の子本人と話すことはあまり多くなかったけれど、付き添いの先生と話することが多く、その最中に男の子の表情がよく変わること気がついた。また、授業中や行事の時などもうれしい時は笑い、悔しい時は泣いていて、喜怒哀楽が表情にでていた。そして、私がその男の子に対するコミュニケーションのとり方を変えたきっかけは小学五年生の宿泊学習の時である。宿泊学習で共に活動する活動班のメンバーとして、その男の子と一緒に話さなかったけれど、話すべきか分からず、あまり話せていなかったけれど、その時班が同じになったことをきっかけに、思いきってたくさん話しかけてみた。一言だけで終わる訳ではない。今までクラス内で一緒に生活してきた経験を活かして、その男の子とコミュニケーションをとる方法を考えて話した。例えば楽しみなどを伝えて、その自分の感情を顔で表すことやジェスチャーで表すことだ。相手が感情を顔で表現するのであれば、私も同じように顔で表現すればよい。そうすれば、コミュニケーションをとることができる。この方法はとてもうまくいった。私が宿泊学習で楽しみなことを、しおりを見せながら話し、楽しみな表情、笑顔をみせた。すると、

その男の子も楽しそうに笑いながら私の話を聞いてくれた。また、私が一方的に話すだけではなく、その男の子にもしおりに書かれている日程の中で楽しそうな事柄を指さしてもらうなどして多くの話をした。私はこの時、「言葉」だけではなく、「心」でつながることはこんなにも幸せな気持ちになるのだと思った。自分の「心」は顔や手で表現できる、そして言葉だけでは伝わらない本物の感情を表すことができる。そう確信した。

この小学生の時の体験は、かけがえのない、私の中に残り続けるであろう思い出だ。この男の子のおかげで、障害をもっている、不自由なところがあったとしても、必ず通じ合えること、コミュニケーションがとれることを学んだ。そして、言葉がなくても私たちに必ず「心」があり、その「心」で様々な人、様々なことにふれ合うことができると思った。私はこれから「心」を大切に思いやりの心、優しさにあふれた心をもつことを目標にして、たくさんの人とつながりを持ち、その輪を広げていきたい。

長崎県身体障害児者施設協議会会長賞

心の距離を近づける

佐世保市立柚木中学校 一年

福本優菜

私は児童養護施設で暮らしています。そこで一緒に暮らしている子にAちゃんという聴覚障がいのある子がいます。

Aちゃんが児童養護施設に来る前、私は他の子とAちゃんが分かるようにあちこちに場所の名前を紙に書いてはっていました。そして当日、説明をどうにかしてあげようと朝から玄関の近くで待って、他の子と「まだかな？」と言っていました。そして昼、一時にAちゃんはやってきました。お姉ちゃんを連れて。私と、Mちゃんは交代で身振り手振りを使って、一生懸命、説明をしました。でも、AちゃんにはYちゃんというお姉ちゃんがいる、Yちゃんは私たちが説明していることを手話で分かりやすく、スラスラと説明していま

した。私は悔しくて、手話ができるようになりたい！と強く思いました。

手話ができるようになったら、Aちゃんと話しやすくなる。そう思い、Yちゃんに、学校が休みの日、手話を教わりに行きました。そして教えてもらっていました。だけど、覚えることが多すぎて、疲れてしまいました。Yちゃんも覚えることに疲れたのか、結局その日はあまり進まずに終わりました。

数日後、ベネッセコーポレーション『チャレンジ小学国語辞典第四版』で調べものをしていたとき、後ろの方に指文字の表し方というページを見つけました。

私は、それを使って指文字を覚えました。一覧表があればYちゃんに教わらなくても指文字を使って

Aちゃんに教われればいいし、指文字を忘れても一覧表を見ることができて便利だと思いました。

今では、指文字は完璧になって手話も少しはできるようになりました。普通に手話で話すこともできるし、遊ぶこともできます。Aちゃんが分からないことがあれば説明してあげることがあります。手話を覚えて、心の距離が近くなっただ様な気がします。手話を覚えて良かったと思いました。この手話を将来に役立てることができたらいいと思いました。

佳作

個性を大切に

長崎市立三川中学校 三年

森 もり 山 やま 優 ゆう 里 り

私が通っていた小学校には、障害を持っている子どもたちが特別な支援を受けながら学校生活を送る特別支援学級が三つありました。そのクラスは知的障害、身体障害などに分かれていました。私の父は教師です。私が小学校二年生から卒業するときまで同じ学校にいました。その頃、父は特別支援学級の先生でした。その特別支援学級はいろいろな学年の子どもたちがいました。父は仕事から帰ってきて家族でご飯を食べている時、その日起きたことの話をたくさんしてくれます。その話のなかに出てくる父のクラスの子どもたちはとても明るくて楽しそうです。父を通じてではありませんが、その子どもたちは、私たち家族に笑顔を届けてくれました。私はその子どもたちに学校でも会います。

私の友達の中には昼休みに特別支援学級に遊びに行くという人もたくさんいました。父は今は学校が変わってしまいましたが、特別支援学級の先生を続けています。そして母も同じく特別支援学級の先生です。二人とも毎日、私に自分の学級の子どもたちの話をしてくれます。私はその話を聞くのが大好きです。そんな父や母の話を何年も聞いてきて気づいたことがあります。それは、特別支援学級の生徒はみんな優しいということです。障害者というと少し怖いイメージを思い浮かべる人もいるかもしれませんが、そんなことは無いのです。話を聞いているとすごく優しいことが伝わりますし、父も母も「優しくして良い子たち。」と言っています。以前、私が父とけんかをしてしまい、買っても

らうと約束したものを買ってもらえないことになりそうだとすることがありました。その話を父がクラスの子に話すと、「それは娘さんがかわいそうです！絶対買ってあげてください！」と一人の子が父に言ってきてたそうです。それを聞いて私は心が温かくなりました。会ったこともないのに私のことを思ってくれたのかなと思うとすごくうれしかったです。結局、私が欲しかった物を父は買ってくれました。他にもたくさん父母から聞いたエピソードがありますがどれも心が温まってほっこりします。私はもう一つ気づいたことがあります。それは私たちが考えられないような視点で物事を考えることができるということです。父や母の話の聞いていると私が考えもできないようなことを言ったり、したりしています。そういう時に私は、「ああそういうとらえ方もできるんだな。」と思います。障害のある人たちといると、いろいろな考え方ができるようになって自分の見方や世界が少し変わったと思うこともありました。要するに、心が豊かなのだと思います。人の気持ちが分かるし、その人なりのすごい考えをもっている。それは、心が豊かということではないでしょうか。もちろん世の中の障害をもっている人の中にはそうではない人もいるかもしれませんが、し

かし決して悪い人ではないと思います。その人にも良いところが必ずあるはずですよ。

周りに障害のある人はいませんか。もしいるのなら、怖いというイメージがあれば捨てて気軽に接してみてください。その人のおかげで自分の見方が広がったり、その人の良いところを見つけれたりできるかもしれません。私は、これから大人になっていくにつれて人間関係が広がると思っています。そしていろいろな人に出会うと思います。自分と違うから、普通じゃないからと避けたりせずに、心を通じ合わせていければいいなと思います。

長崎県知事賞(最優秀賞)

個性

長崎県立諫早農業高等学校 二年

山 口 結 愛
やまぐち ゆあ

みなさんは「障害」という言葉を聞いて何を思い浮かべますか。多くの人が身体障害について思い浮かべるのではないでしょうか。私もパツと思いつくのは身体障害かもしれません。ですが、身近に障害を持つ人がいることや、高校で福祉について学んだことにより様々なことを考えるようになりました。

私の弟は知的障害者です。会話をすることや字を書くことなどできません。私が障害を理解できたのは小学校にあがってからでした。最初はそれが普通だったので何も思っていませんでした。ですが、理解できるようにってから、障害を持っている弟がいることを恥ずかしく思うようになりました。今考えると馬鹿らしく思えますが、小学校低学年の頃の私は弟のことを

誰にも知られたくないと思っていました。

その考え方が変わったのは小学三年生の時に、ダウン症を持つ人と同じクラスになったことが大きかったと思います。その友達はいつも笑顔でおしゃべり好きで、毎日楽しそうでも元気でました。私はその姿を見て、だんだん障害を持っていることは恥ずかしいことではないと思えるようになりました。そのことがなかったら私は今このように自分から弟のことを話したり、高校で福祉について学ぶことはなかったと思います。

考え方が変わってから弟との接し方も変わりました。前は、「どうせわからないし。」や「何もできないし。」と決めつけて弟のことを理解して手伝えることなどしようとは思いませんでした。弟の気持ちを考えることな

どなかったのではないかと思います。しかし、考え方が変わってからは弟の気持ちを理解しようとしたり、弟のすべてを手伝うわけではなく、本当にできないことを手伝うようにするようになりました。今では、学校の福祉の授業で学んだことを活かして弟と接するようになりました。それでも、弟のことをすべて理解できるとは思いませんし、何をやりたいのか、何を考えているのか分からないことも多いです。だから嫌になったり、どうしても弟に障害があるんだと思ったことも一度や二度だけでなく何度もありました。また、そんなことを思ってしまう自分自身を嫌になることもありました。

そんな時、母から「人それぞれ個性があるから。」と言われました。私はそれを聞いて弟の障害について深く考えすぎたんだなと思いました。たしかに健常者と障害者は違うかもしれませんが、健常者が一人ひとり違う個性を持っているように、障害者の「障害」がその人の個性だとするならば、同じ人なんていないし、その人のすべてを理解できるわけではないと思うようになりました。

今では、弟の通っている特別支援学校の行事へ行ったり、デイサービスの行事にも参加したり、自分の学

校でのボランティア活動など通して、障害者と関わる機会があれば自ら行くようになりました。小学生の頃の自分からすると想像もできません。今は逆に、弟に障害があることが恥ずかしいと思っていた頃の自分がとても恥ずかしいです。

私はまだ福祉について学びはじめたばかりで、知らないことの方が知っていることよりも多いです。だからこそ、これから「障害」のことだけでなく色々なことを学んで、自分の知識を増やしていけたらいいなと思います。私は弟が障害者だからこそ周りの人よりも障害者と関わる機会が多かったり、障害について少しだけ知っていることがあったり、弟中心かもしれないですが、周りと違う視点で物事を見ることができると思っています。まだ全然かもしれませんが、そのことに慢心するのではなく、学び続けることで自信にしてこれからも活かしていきたいと思えます。

今は、弟のことを誇りに思えます。弟のことを話すのに抵抗がなくなっていて、好きになることができているよかったです。これからは、健常者や障害者関係なく、すべての人が過ごしやすくなればいいなと思います。また、思うだけでなく自分ができることはやっていきたいです。

長崎県社会福祉協議会会長賞

みんな違って、みんないい！

一般

しもたまり
下玉利 郁美

タイトルの言葉は、二十七年前、長女の卒園式で担任の先生が、はなむけてくださった一人ひとりの園生活、映像とエピソードで紹介された後のメッセージ。今でも鮮明に覚えている。

あの頃は、インクルージョンという言葉もその意味も知らなかった親子が、実は！その世界で育ててもらっていたという驚愕の事実。そして、この事に気付いたのは、卒園後、ずっと後のことだった。

ある日、新聞でこの作文の公募を披見した時、この珍妙な体験を書いてみようと思った。

娘二人が通った園は、風香る小高い丘に位置し、海と山にすぐ手が届いた。そして、その教育方針は、感性豊かで、多彩で、温かい人間愛に溢れていた。園児

の中には障害をお持ちの方も沢山おられた。昨今でいうところの自閉症スペクトラム・ダウン症候群・精神遅滞のお子さん、車イスに乗っていたお子さん、弱視のお子さん、懐かしい思い出と共に脳裏をよぎる。ある夏、ある子に、釘とは程遠く細くもない足を木槌ちでコンコン！されて泣き出しそうだった娘の写真も楽しい思い出だ。

園の皆で生活していた空間が、実は！インクルージブ教育？「ホント？」「え〜っ？そうだったの？」「あの環境はふっうじゃなかったの？」「そんなこと、意識してなかったし、な〜んも考えてなかったよ」と、大人になった娘たちは、よく語り合っていた。

当時の園のポリシーは、あの時代にあっては珍し

かったのではないだろうか。私たちは何かとラッキーだったのだろうと、後々その有難さを沁々と胸に刻んだ。園で過ごした歳月は、娘たちの心も未来も感受性豊かに育んでくれた。

園での元気でヤンチャな子どもたちは、何をすることも一緒だった。ヤギと海へ散歩に行くのも一緒（先生の勇気と発想に仰天した）平皿に、赤青黄の三色をたっぷり載せた絵具で無限に色を創り出し「今日は鼻から顔を描くよ」と太い筆でスケッチブックに集中する時も、パンツ一枚ボディペインティングする時も一緒。毎月の遠足も、お泊り保育のカレー作りも、お遊戯会も一緒。園庭で遊ぶ時も、磯遊びして砂まみれで帰ってくる園バスの座席もお隣同士。クラス縦割りで遊んだ仕切りのない教室でも、みんな同じように笑って転がり回っていた。じっとしているのが苦手だった、イケメンA君とマンツーマンだった男性保育士チームとも、「あゝ帰ってきたよ」と、自然に合流して遊ぶこともあったそうだ。

ある年の避難訓練で、子供たちは誰に指示される訳でもなく、手に手を取り合って外への階段を駆け上がった。周りの友だちを、仲間を、自然に気にかけて手を繋いだそうだ。この日の様子をお便り帳で読んだ

私は、思わず涙がポロポロこぼれた。「火事ですよ、みんな落ち着いて・・・」の第一声を聞くなり、コミュニケーションが苦手だったBちゃんの所へ一目散に駆け付けた娘の行動に驚き、手をギュッと繋いで避難した娘が愛おしかった。「他の人には分らんけど、私にはBちゃんが何て言いたいか分かるとヨ」と嬉しそうに話した事を後に聞いた。目と目で、心と心で結ばれていたんだね。

当時、園に通っていた子どもたちは、どんな時も、何ら特別感を抱くことなく、同じ時を過ごしていたのではないだろうか。私たち保護者も同じ感覚だったように思う。知らず知らずのうちに、インクルージョンという、まさしくその世界で親も子も育ててもらっていたのだ。今考えると、とても贅沢な環境だったと身に染み入る。

個性を尊重することも、独創性も、優しさも、熱意溢れるポリシーを基軸とした保育を通して、無垢な心に種を蒔いてもらった。

園長先生、保育士の先生方、手作り給食の先生、ボランティアの体操や算数・習字の先生、大工仕事やペンキ塗り、ヤギ小屋作りも子どもたちと一緒にしてくださった園バスの先生、沢山の方々に心から感謝して

いる。在園時も卒園後のキャンプも、園との二人三脚も、何でも楽しむ心を持った保護者の仲間たちにも感謝している。

素敵な園だった。こんな幼児教育をしてくれる所が数多くあったらいいなと思う。幼い子どもたちにとつて、この園のような環境で育つことは、本当に大切だと思う。

人は、顔形が違うように、身体の器官や能力も異なる。誰にでも、生きづらさや生活の妨げになる障壁があるだろう。人それぞれに「障害」が有ろうと無からうと、「普通に」「共に」「皆で」助け合いながら生きていける世の中でありたい。

平成一六年から始まった【障害者週間／十二月三日～九日】皆で「ノーマライゼーション」「心のバリア」「共生社会」に想いを馳せよう。自らもフィードバックしよう。インクルーシブな地域を紡ぐために、微力ながら何ができるかを考えよう。そして、毎年少しずつ歩んでいこうと思う。

障害者週間のポスターやイベントが、誰の心の扉を開き、何かを始める初めの一歩のきっかけになることを心から祈っている。

『みんな違って、みんないい！』この思いも広がり

ますように。

幼心にキラキラ光る種が蒔かれ、愛着をもって育ててもらえますように。

どうか、この世に生を受けた子どもたちが、あどけない笑顔で、すくすく育っていける世界と居場所が増えますように。

長崎県手をつなぐ育成会会長賞

私の生きる糧

一般

草くさ加か和かず子こ

私にとって、「障害」は幼いころから、身近にあるものでした。なぜなら、兄が養護学校在籍者でもあったからです。

重病だったため、入院生活を余儀なくされていた兄は、通常の学校に通うことが出来ずに、病院に隣接する養護学校に通っていました。そして、幼い私も、両親に連れられて、見舞いで病院を訪れたり、時として養護学校の学校行事の運動会などにも、家族として徒競走や玉入れ、綱引きなどにも参加させてもらったりしていました。お世話になっていている兄ばかりでなく、家族にとっても、病院と養護学校は、もはや日常生活の一部になっていたのです。

病院や養護学校で出会う子供達は、兄と同様に、みは困難を極め、発作を起こしては、また病院にトンボ返りということが続きました。一週間の予定で、外出許可を取っても、その期間中まるまる家に滞在するということは難しく、急変する体調に気を遣いながらの生活で、「お兄ちゃんといっぱい遊ぼう」と張り切っていた私は、その度に、共に過ごせないという状況に打ちのめされて、病院へ戻る兄を恨めしく思ったこともありました。

「他の友達は、兄妹でいっぱい遊べるのになんで私のお兄ちゃんは、普通でないの?」と悲しく思ったり、また、命の危機に度々陥る兄への対応で忙しくなる両親は、健康に生まれた私を相手にする時間は必然的に限られたりして、今思えば、子供なりに私は小さなストレスを抱えていたかもしれせん。

しかし、私は兄を通して、兄の命を懸命に救おうとしてくださる医療従事者の方々や、兄が自分で出来ることを少しでも増やそうと教育を施してくださる養護学校の先生方に対して、感謝の思いが次第にいっぱいになっていきました。

なぜなら、そのサポートに相応するかのようには、兄は少しずつ症状も落ち着いてきて、そして、全国障害児書写コンクールで優秀賞をいただくなど、身体面・

んなそれぞれ何らかの病気を持って誕生しており、自宅での生活が困難なため、親元から離れた日々を過ごしていました。兄と同じ病室には、六人の子供達が一緒に入院しており、幼心に「お兄ちゃんばかりでないんだ。みんなお家に帰れないんだ。可哀そうだな」と思ったものでした。

そんな兄も、病院の先生方や看護師の方々そして養護学校の先生方の親身になったサポートのお陰で、症状も軽減し、一時的に自宅に戻ることができるようになりました。私は兄と一緒に自宅で過ごせるということが、とても嬉しくて、帰りの車内では、ずっと兄の手を握っていたことを今でも覚えています。

しかし、医療体制が整っていない自宅での兄の生活学習面共に改善していき、正式に退院できる日にこぎつけることができたからです。

今度こそ、本当の退院だと自負する兄は、病院の玄関を出たときに「太陽がまぶしい」とつぶやきました。それは、まるで、今からの新しい生活に対する期待と不安が入り混じっているかのようなそんな感じを感じました。

そして、月日は流れ、今、兄は元気に暮らしています。命さえも危なかった兄が今もなお生き続けていることは、間違いなく、当時兄を支えてくださった医師や看護師などの医療スタッフの方々や養護学校の先生方の御蔭です。そんな皆さんを幼いころから間近で見ている私は、現在、特別支援学校の教員として、障害を抱える児童生徒と関わる毎日を過ごしています。ミクロの世界で成長していると称される子供達に日々携われる喜びは、何物にも代えることができない貴重なものです。兄に施していただいたことを恩返しするかのようには、障害のある子供達とたくさん経験と感動を共有し、共に有意義な時間を重ねていくことが今の私の生きる糧となっています。

長崎県知的障がい者福祉協会会長賞

家族だから、妹だから

長崎県立諫早農業高等学校 三年

まつもと 茉莉奈

今年中学校に入学した妹は知的障害と身体障害があります。生後九か月の頃、髄膜炎と水頭症を患い、その後遺症で障害が残ってしまいました。一時は一生寝たきりかもしれないと言われた妹も、今では手伝いは必要なものの、日常生活のほとんどを一人ですることができるまでに回復しました。

また、今では笑顔であった両親も、妹が長期入院を余儀なくされていたあの頃は、憔悴しきっていた様子しか印象がありません。そんな両親を見た私は、幼いながらに「自分はわがままを言っただけじゃないんだ」と言い聞かせていたように思います。だから、妹のお世話は率先して行っていました。純粹に妹が可愛かったというのがありますが、「障害を持っているから自分

が助けてあげないといけない」という思いや、「妹のお世話をしているお姉ちゃんだね」という周囲の評価を受け、妹に向けられていたばかりの目を自分に向けて欲しかったのだと思います。

そんな私が小学六年生になった頃、妹は私と同じ学校の特別支援学級に入学してきました。同じ学校に通えるのはとても嬉しかったですが、入学式の次の日、泣き叫ぶ妹をおんぶして学校まで連れて行ったり、遠足では妹と妹の先生と三人で時間に支障がないようにみんなより先に出発したり、さらに妹が家に一人にならないように友達との約束を断らざるを得なかったりと自分を犠牲にしてまで妹のことを優先しなければならぬ生活に嫌気が差し、妹を負担に思うことが増える

ようになりました。

しかし、そんな私を変える出来事がありました。

何が原因だったかはよく覚えていませんが、妹に対する不満が爆発し、母と激しい口論になったことがあります。「好きでお姉ちゃんになったわけじゃない」と、妹は生まれた日の喜びは今でも鮮明に覚えているほど待ち望んでいたのに、その時の一瞬の感情だけで本心とは逆のことを言ってしまった。ハッとして母の顔を見るととても悲しそうな目をしていました。それは、妹の病気が分かった時と同じ目でした。「あの時、お母さんを悲しませてはいけません。お母さんを困らせてはいけません。お母さんの支えにならないといけない」と誓ったのに」と後悔したのと同時に、自分が情けなくなつて涙が溢れてきました。そんな私を見て、母は、「普通に考えたらお父さんとお母さんが先に死ぬとやけんね。その時は妹にとってあなたが一番の頼りになるとよ。妹にとっての家族はあんたしかおらんくなる時がくるとやけんね。たった一人しかおらん妹を大切にしないさい。」

と言いました。思い返せば、父や母に酷く叱られたときに励ましてくれる人、毎日必ず「いってらっしゃい」「おかえり」と言って元気をくれる人、それはどれも

妹でした。今まで妹を支えているのは私の方だと思っただけでしたが、むしろ支えられているのは私の方でした。それなのに、妹をいらぬと思ってしまう。私の目からさらに涙が溢れます。「何したと？」と声かけてくれた妹に「ごめんね」と返し、どんな事があっても妹を守る決意をしました。

以前、妹の知能指数は五歳程度だと聞きました。でも、妹には十二年間生きてきた「経験」があります。それは、知数指数では表すことのできない「妹が生きてきた証」でもあります。小さい頃は泣き叫ぶ妹を抑えるためにベルトで固定されて治療を受けていたのに、今では歯が痛ければ自分から病院へ行こうと言い、診察台に乗ります。それは、病院は怖いものではなく、悪いところを治療してくれる場所だと学んだから。結婚式の雰囲気圧倒されて終始泣いていたのに今では泣かなくなったのは、結婚式は嬉しいことだと学んだから。

私は妹の頑張る姿に何度も勇気をもらいました。だからこそ「障害者は特別だ」という偏見がなくなり、誰もが暮らしやすい社会になってほしい。「健常者もつと障害者に歩み寄り教科書では学べない様々なことを学んでほしい」と思います。きっと街中で見かける障害

者は、世間の人からすると「障害者の中の一人」かもしれないませんが、私たち家族にとっては「大切な家族の中の一人」なのです。

いつか妹も立派な大人になる時が来るでしょう。その時、一体どれだけの人が妹のことを温かく見守ってくれるでしょうか。きっとこれから辛い思いをすることもあるでしょう。でも、私は妹を守り続けます。それは、妹が障害を持っているからではありません。

家族だから、妹だから。

長崎県精神障害者家族連合会会長賞

当たり前

長崎県立諫早農業高等学校 二年

江島志帆

みなさんにとって当たり前であること、普通なことは何ですか。私にとって当たり前は自分がきょうだい児であることです。きょうだい児って何、と疑問に持たれると思います。きょうだいは平仮名、児は児童の児と書いて「きょうだい児」です。きょうだい児とは、障害や病気を持った子の兄弟姉妹を指します。私の弟は、弟が五歳のとき発達障害と診断され、私はきょうだい児になりました。発達障害を持つ人は年々増加し、十人に一人の確率とも言われており、多くの人が何かしら発達障害と関わりながら生活しているということになります。

去年の八月、私はひまわりキャンプという発達障害、身体的な障害を持つ子供達と二泊三日過ごすキャンプ

にボランティアとして参加しました。子供達とボランティアが二人一組でバディとなるのですが、私は小学三年生の自閉症をもつ男の子とバディになりました。発達障害は、大きく三つに分けられると言います。落ち着きがなく、忘れ物が通常よりもすぐ多かったです。する注意欠陥・多動性障害、文章の理解ができなかったり、計算の処理がしづらいなどの学習障害、そしてこだわりの強さなどからコミュニケーションをとることに困難さがある自閉症です。

キャンプ前のオリエンテーションで、男の子の母親から男の子関わる際、注意することをいくつか教えていただきました。後ろから急に声をかけたり、大きな音が出るとものすごく驚いてしまうこと、自分からは

なかなか言葉が出づらいため、「はい」か「いいえ」で答えられる質問がいいこと、時間の管理が苦手、何の行動とればいいのか分からなくなることなどです。発達障害が病気ではなく、その人が持つ「特性」だと言われている理由がよくわかると思います。自分では日頃何も気にしなかったことでも、その男の子が敏感にいろんなことを察知していることが身をもって伝わり、その子の世界があるのだと感じました。同時に、注意することが多く、障害者育児をしている人はすぐく愛を持って接しているんだと思いました。私自身もきょうだい児でもあり、両親の苦労を知っているつもりでしたが、いざ自分がやってみると、たったの三日ですら気疲れして、いつも笑顔で接している親の偉大さに気付かされました。

ひまわりキャンプの最大の狙いは、日頃育児をしている親の一時的な休息や、日頃さみしい思いをしているきょうだい児と親の時間の確保だと代表の方はおっしゃっていました。毎日家事育児などに追われ、疲弊している家庭も少なくないと思います。それにきょうだい児がいる家庭も多く、自分自身が感じた愛情の差だったり、きょうだい児であることの不安を減らすことのできる、とても大切な行事に関われたことがすこ

く嬉しかったです。私は今、誇りに思うことがありません。それはきょうだい児であることです。もし、弟が発達障害ではなかったらと考えたことが何度もありました。もっと親から愛されていたかもしれないし、今までの生きづらさや将来への漠然とした不安や葛藤も感じなかったと思います。でも、きょうだい児であるからこそ、人への接し方や、こんなことをされたら嬉しいか悲しいかと相手の気持ちを考えるような、人として大事なことをたくさん学べた気がします。私がこの作文を通して伝えたいことは、自分が思っている当たり前はだれかの当たり前ではないこと、いろんな当たり前があるということです。私の好きな名言に「常識とは、一八歳までに身につけた偏見のコレクションだ」というものがあります。背が高い人低い人、髪が長い人短い人、赤色が好きな人青色が好き人、それらと一緒に障害を持っていることも一つの個性だと思えます。どれがいいかなんて人それぞれだと思いません。誰かと違うからという理由で自分や他の人を否定しないでほしいのです。みんながそれぞれ相手を理解し、思いやれば、もっと暮らしやすくなるのではないかと思います。

私は今福祉について勉強しています。初めて聞くこ

と、知ることが多いです。今からたくさんのことを学び、みんなが過ごしやすい社会をつくる社会福祉士になることが夢です。みなさんも自分の当たり前は誰かにとつての当たり前なのか、相手にとつてうれしいこととは何なのか、ぜひ考えてみてください。

長崎県精神障害者団体連合会代表賞

人間らしく生きていく権利

長崎県立諫早農業高等学校 二年

東 ひがし 理 り 奈 な

私が小学六年生の時、クラスメイトに発達障害をもった女の子がいました。彼女は授業を別の教室で個別に受けるのがほとんどでしたが、体育や音楽の授業は他のクラスメイトと一緒に受けていました。

彼女は運動をすることが苦手だったので、運動会の全員リレーでは他の子より走る距離を短くしたり、体育の授業のドッチボールでは他の子より近い距離からボールを投げたりするなどの彼女のためのルールをクラスの皆で決めて、彼女に文句を言う人は誰もいませんでした。

ある日、行事の一つである長縄大会に向けて練習していた時のことです。長縄は連続して跳ばないと回数

が伸びません。しかし彼女は連続で跳ぶことが困難く入ることができたのです。ですが、縄に足が引っかかってしまい、跳び越えることはできませんでした。その後、跳ぶことが得意な子が率先して彼女に跳び方のコツを教えて、何度か練習した結果、ようやく跳ぶことができたのです

長縄大会の本番の日まで私達は昼休みや放課後に欠かさず練習を行い、少しずつ上達していききました。そして、迎えた本番。私のクラスは優勝はできなかったものの、今まで一番良い記録を出すことができ、思い

出に残る一日になりました。高校生になった今、当時の私を振り返ってみると、彼女の障がい理由に物事の判断をしまったことに心から後悔しています。障がいをもってるとしても一人の人間であることに変わりはありません。彼女は普通の学校生活を過ごす中でよく笑っていたし、私にも明るく声を掛けてくれました。彼女が明るく生きていたのは、障がいを悲観的に受け止めるのではなく「個性」と認識していたからだと思います。私

はこれからは決して障がいを理由に物事の判断をしないようにしたいです。私が自分自身の考え方を整理して、彼女が捉える障がいの目線に立てたのは、学校の福祉の授業の影響が

だったので、彼女に一番最初に縄を跳んでもらうようにするとクラスの皆で決めたのですが、いざ練習を始めると彼女はなかなか縄に入れません。縄を回す人は入りやすいようにゆっくりと回しているのですが、どうやら入るタイミングがつかめないようです。その時、私の後ろに並んでいた男子が「絶対優勝できんやん。」とつぶやいているのが聞こえましたが、私も正直、優勝は難しいと思っていたので聞こえていないふりをしてしまいました。

このままではいけないと思い、一旦練習を中止してクラスの皆で話し合った結果、彼女の背中を次に跳ぶ人が軽く押してみたら縄に入りやすいんじゃないかという意見ができました。それを実践してみたら、ようや

が大きいと思います。なぜなら、福祉の授業で障がいのある人の人格や尊厳について学んだからです。

授業では、障がいのある人の支援の基本として、障害のある人もない人と同じように地域で暮らし、社会的活動をする社会を目指すというノーマライゼーションの理念を学びました。それは、生活条件と環境条件の整備や活動を視野に入れ、障害のある人もない人もすべての人が社会のなかで個人として互いに人格を尊重し、支え合いながら地域で共に生活する社会を目指すことであり、個人の尊厳を守る人間観・生活感が基礎となっていました。ノーマライゼーションを実現するためには、住居・就労の場・社会的活動の機会を整備することが必要であることも分かりました

また、障がいをもつ方の気持ちを真剣に考えて受け止めることや、尊重することの大切さを知りました。

これから私は、障がいの有無に関わらず人の気持ちをその人の立場になって真剣に考えるようにしたいと思います。そして、人は誰でも人間らしく生きていく権利があるということを忘れないように生活していこうと思います。

長崎県身体障害児者施設協議会会長賞

たくさんの笑顔に触れて

長崎県立諫早農業高等学校 三年

やまぐち こころ
山口 夢心

「ひまわりキャンプ参加してみらん？」

きっかけは先生の一言でした。高校一年生の夏、ずっと憧れていた保育士ではなく、「何か困っている人を助ける仕事がしたい、だけど子供と関わる仕事もしたい。」と思うようになっていた時期でした。ひまわりキャンプは障害を持った子供達と二泊三日で遊んだり、料理を食べたりお出かけしたりするボランティアです。初めは障害を持った子供達と聞いて、まだ福祉について興味も知識もなかったので正直少し怖いなと思いました。しかし「行ってみよう」と軽い気持ちで参加することを決めました。

ボランティアの事前打ち合わせということで、参加するボランティアスタッフと子供達の保護者が集まり

ました。そこで数チームに分かれて活動することになり、私は重度の障害を持つ子供達のチームに入ることになりました。私が担当することになったのは中学生の男の子でした。書類を見ながら好きな食べもの、食事の仕方、何をしてくれて何がだめなのか、保護者やスタッフの方と打ち合わせをしました。打ち合わせが終わった後も初めて触れ合うことに緊張と少しの恐怖心を持ったことを覚えています。

キャンプ当日。いよいよ子供達と対面する時、扉が開くとたくさんの子供達が飛び出してきました。笑顔で走ってくる子、少し戸惑いの表情がある子、不安なのか泣いている子、その色んな表情を見たとき、緊張が取れて和やかな気持ちになりました。車イスの子がい

たり、機械をつなげたりしている子もみんな表情はイキイキとしていました。私が担当する男の子はずっと車イスで話すこともできません。だけど手を握りながら「初めまして」とあいさつをするとうごく嬉しそうな表情を見せてくれました。その後、レクリエーションを通して色々な子供達と触れ合いました。ひとりひとりと違った障害を持ち、色々な個性を持ち合わせていて、すぐくおもしろく楽しい時間でした。食事の時間はその子に合わせた食べ物の形状、食器で初めて見るものばかりでした。食べさせ方もあまりわからず手探り状態でしたが、施設の職員の方が丁寧に教えて下さいました。汁物など水分が多いものから食べさせてあげると飲みこみやすいこと、お茶はサラサラすぎて誤嚥するのとろみ剤でとろみをつけるなど、様々なことを教えて下さいました。なかでも一番印象深いのは、男の子が通っている施設に行った時のことです。入浴するために行ったのですが、施設の職員の方々はすごく笑顔で出迎えてくれ、男の子も笑顔になり楽しそうな表情をしました。それだけで施設が楽しくて、職員さんの方への信頼も厚いのだろうと一目でわかりました。それと同時にこの仕事はとても素晴らしいものだと感じました。職員の方がひとりひとりの子供に

笑顔で話しかけると子供達もみんな笑顔になっていました。

このキャンプを通して、障害者の子供達と三日間一緒に過ごし、介助していく中で確かに「大変だな。」「きついな。」と感じることは多かったです。ですが、それ以上に子供達の笑顔に助けられ、この子のために頑張ろうと思うことができました。足が不自由でも手が上手く動かなくても言葉が話せなくても、表情で訴えてきたり、何かを一生懸命になって取り組もうとする姿を見たとき、自分もこの子達に負けないくらい頑張らないといけないと思いました。初めに助けてあげるの気持ちで行ったキャンプでしたが、帰る頃には私が学ばされ励まされ、子供達にたくさんの笑顔や元気をもらいました。私は今、ヒューマンサービスクースで介護や障害など福祉について勉強しています。あのキャンプをきっかけに「本格的に子供の福祉を学びたい。」「たくさんの子供達を笑顔にしたい。」と思うようになり社会福祉になるという目標ができました。社会福祉になるためにはまだまだ道のりは遠いですが一杯がんばろうと思います。そしてたくさんの人を笑顔にできる素敵な大人になりたいです。

佳作

今の自分に感謝

一般

城しろ谷たにてるみ

私は、遺伝性の脊髄小脳変性という難病です。母方の遺伝で、母と二歳違いの兄も同じ病気でした。二人とも早くに亡くなり、私も遺伝しているのではないかと、不安を持ちながらの、日々を送っていました。

思い起こせば九年前、居宅支援事業所（ケアマネージャー）の管理者として、勤務していた頃のことです。介護保険の仕事で、管理者業務と重なり、身体に異常を感じ、受診したところ、恐れていた遺伝性の脊髄小脳変性症と告げられました。夫や家族にも言えず、歩けなくなる自分を予測して、徒歩で通勤することを思いつき、片道四〇分程度の距離を、ウォーキングポールを支え、暑い日も寒い日も、暗い時は照らしながら、交通量の少ない山間部を歩き、病氣と闘っていました。

病氣の進行を心配した私は、少しでも負担を軽くして、

もらいたいとの思いで、上司にだけ病氣の事を告げ、「管理者を解いてください。」と相談しました。しかし、聞いてもらえず、何度も相談した結果、やっと二年後に理解してもらえたと、よろこんだものの、しかし、そこは歩いて、通勤できる所ではなく、急に退職された後の、今よりハードルの高い、部署への移動を告げられました。そこで私は、全身の力が抜け、崩れてしまいそうな思いになり、

「私は病氣です。定年まで勤めさせてください。」と願いましたが、返ってきた言葉が、

「誰でも多少の負担はある。」との事でした。私は、この病氣を理解されているか、疑問をもちました。何

度も辞めようと考えましたが、生活を守るためにと思うと踏み切れず、できるところまでとの、思いで必死でした。

新しい部署では、

「適任者ね。」何人もの方から祝いの言葉を頂きました。ただ私は、

「病氣があるので。」と言ったものの反面では、自分を認めてもらえて、嬉しい気持ちもあり、複雑な思いでした。帰宅途中、歩ける場所に立ち寄り、頑張ってみても、雨の日や仕事の疲れで続かず、継続できませんでした。

新しい部署になれると同時に、ストレスが重なり、三か月の病氣休暇を頂きましたが、病氣は改善しませんでした。予測していたとおり、あと一年半で定年というのに、終えることが、できませんでした。

退職してからは、毎日広場で歩いたものの、病氣のことはかり考える日々が続き落ち込み、そして次第に、進行していきました。昨年、県保健所（諫早）で難病の会があり、はじめて参加しました。そこには、県の担当者、医師をはじめ医療関係者、本人、家族の集まりでした。すぐ私に、県から、

「職場への病氣のことを相談しましたか。」と質問さ

れました。私は、ただ、

「相談しました。」と答えました。

「理解されない時は、こちらから説明します。」との事でした。

私は、誰にもわかってもらえない苦しみを聞いてもらえる所があることを、はじめて知り、少し希望がもてました。

そんなある日、素晴らしい人に出会い、心も身体も和らぎ、次第に前向きになっていきました。以前のよういきませんが、病氣と必死に戦いながら、本当の福祉を学びたいと希望を持っています。

振り返ってみると、今まで違和感なく、十七年余り、勤務できたことを、不思議に思います。それと、仕事が出来なくなる自分自身が、許せなかったのでは、ないかと思えます。人生は、自分次第で変えられる。自分の生き方、考え方の、間違いに気づきました。病氣になって、今の自分に感謝しかありません。

ハローワークに、障害者雇用の相談をしていましたので、通院の帰り立ち寄りしました。

「今は、コロナの影響で求人がないけれど、また、何かあれば連絡します。」との丁寧な対応をしてくださいました。世の中が落ち着いた頃には、仕事に就け

る。それまで、もう少し身体を慣らしておこうと、更なる希望となりました。

今までの経験を生かし、何か一つでも、社会の役になればとの、思いでいっぱいです。住み慣れたところで、障害者もすべてみんなが、安心して暮らせる社会を築き、そのような地域福祉を後者へ繋いでいくべきだと思っています。

佳作

優しさとは

長崎県立諫早農業高等学校 三年

野のぐち
口梨り
央お

あなたは障害のある人たちについてどう考えていますか。私はあまり自分に関わりがないと思っていました。ですが、小学生の頃の友達との関わりの中で考え方が変わっていきました。

私が小学生の頃、知的障害を持った男の子が、クラスにいました。その子は少しおとなしめでおっとりした男の子でした。低学年の頃はみんな仲良しでした。でも学年が上がるにつれて、おっとりとしていたその男の子に障害があることがわかり、気を遣って色々なことを手伝ったりするようになりました。そして、少し距離ができたように感じました。私達はみんな良かれと思ってその子の手伝いをしていました。

りやりたかったのかもしれない。私の手伝いなどいらなかったのかもしれない。今となっては、もう聞くことができません。その時は親切心でやっていました。でも彼からしたら大きなお世話だったのかもしれない。小学生の頃の私は優しさというのを履き違えていたのかと思います。

相手の立場になって、物事を考えて行動する。それが優しさなのかもしれないと今は思うようになりました。人の気持ちを考えて行動するというのは、小さい時から親や先生にたくさん言われてきたことで分かっているつもりになっていました。ですが、小学生の頃は自分の中の勝手な解釈で「障害があるから自分一人でなにかをやるのは難しいだろう。そして私達が手伝ってあげなければいけない。」と置いていたのかも知れません。私はこの出来事を思い出す中で、もうひとつ思ったことがあります。私は小学生の頃、無意識に差別をしてしまっていたのかもしれないということです。ただの親切心のつもりだったけれど、「やってあげている」という気持ちがあったのかもしれないと思いました。男の子に障害があるから自分の方が少し上の立場になったつもりになってしまい、「手伝ってあげなければ」とか「教えてあげなければ」などとい

低学年の頃は、みんな同じように障害の有無に関わらず接していました。障害があるということを理解していなかったからではなくて、障害があるから他の人とは違うという意識がなかったんだと思います。低学年の頃は分からないことがあったり、困ったりしたことがあったら一緒にやっていました。意識してやっていたわけではなかったと思います。だけど学年が上がると、障害について理解したつもりになっていた頃、「障害のある人は自分でなにか物事を進めていくのが難しい。私が手伝わなくてはいけない。」と男の子が、なにかしようとする度に私が先にしてしまっていました。「もしかしたら、その男の子はおっとりした子だから、自分のペースがあって、そのペースでゆっくり

う気持ちになっていたのかもしれませんが。あれだけ「差別はだめだ。」と教えられていたにも関わらず、気付かないうちに差別をしてしまったのかと思うとなんとも言えない気持ちになります。あの時、自分が上の立場になったつもりで「してあげている」という考え方ではなく、男の子の気持ちを考えて協力して一緒にしていくような考え方だったら、彼との関わり方も変わっていたのかもしれないと思いました。

私がこの作文を書きながら、小学生の頃のあの男の子との出来事を思い出していく中で「当たり前のようにになっていた大切なことを改めてしっかり大切にしなければ、いけない。」と思いました。相手の気持ちを考えて行動するというのは、自分がしんどい時にはできなくなりそうになるかもしれません。けど、一歩先に進んで相手の気持ちを考えてから行動する人が増えたら、この世界はもっと優しさで溢れるのではないかなと思います。これから進学先、就職先などでたくさんの人と接する機会があると思います。子どもでも大人でも障害があってもなくても、相手と同じ目線で相手の気持ちを考えて行動することのできる人間になりたいです。

ポスター

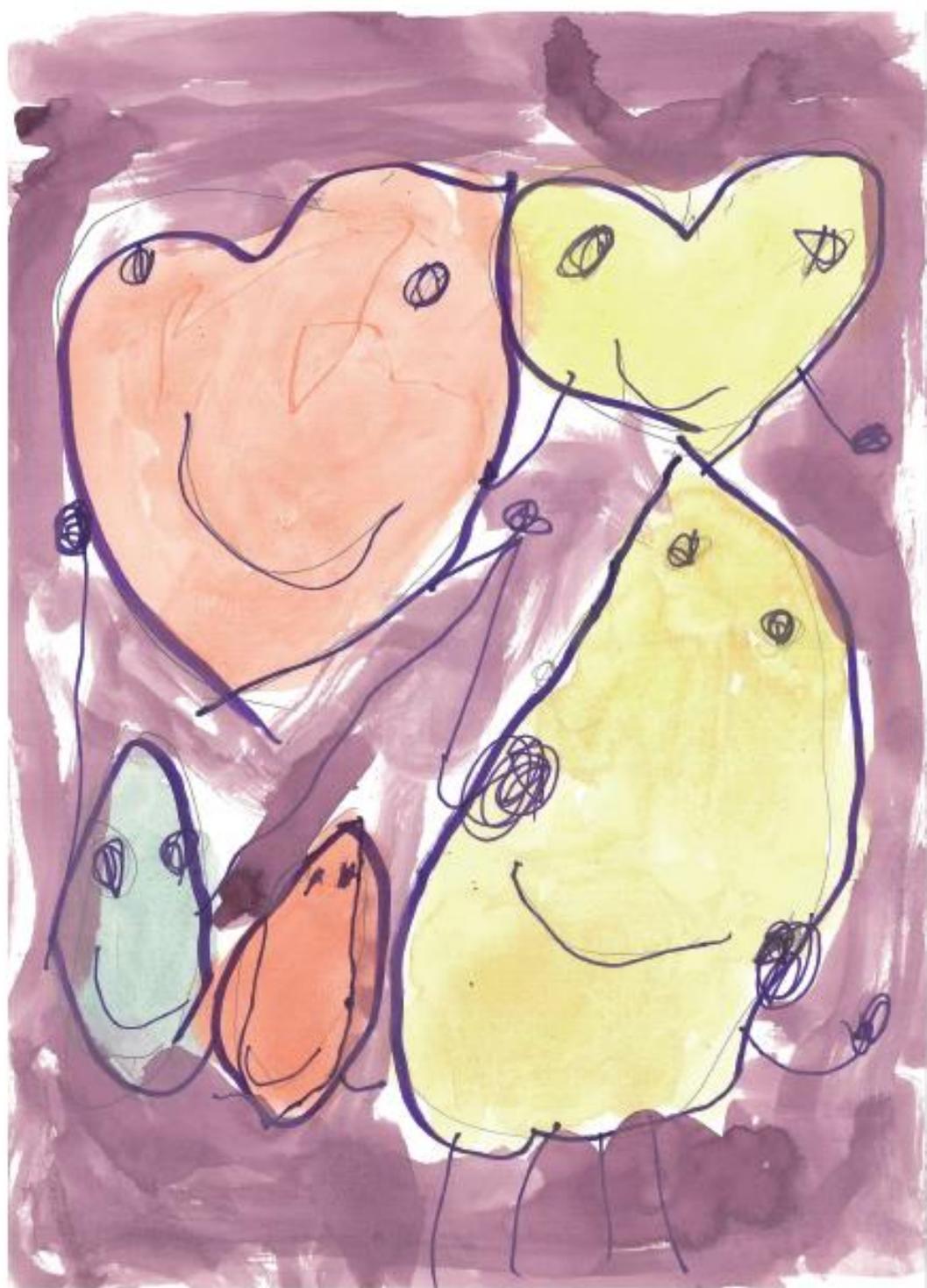
小学生部門

長崎県知事賞（最優秀賞）	おばまの森放課後等デイサービスそら	矢崎はるか	二年	……	53
長崎県教育委員会教育長賞	南島原市立南有馬小学校	本村恋奈	六年	……	54
長崎県社会福祉協議会会長賞	おばまの森放課後等デイサービスそら	伊藤悠晴	一年	……	55
長崎県身体障害者福祉協会連合会会長賞	五島市立本山小学校	榎田琳	四年	……	56
長崎県手をつなぐ育成会会長賞	おばまの森放課後等デイサービスそら	馬場直人	五年	……	57
長崎県知的障がい者福祉協会会長賞	おばまの森放課後等デイサービスそら	本多陽太	五年	……	58
長崎県精神障害者家族連合会会長賞	時津町立鳴鼓小学校	向井啓恭	四年	……	59
長崎県精神障害者団体連合会代表賞	おばまの森放課後等デイサービスそら	木村ヒヨ	五年	……	60
長崎県身体障害児者施設協議会会長賞	おばまの森放課後等デイサービスそら	馬場侑人	五年	……	61
佳作	時津町立時津小学校	酒井優和	四年	……	62
佳作	時津町立鳴鼓小学校	向井姫菜乃	六年	……	63

中学生部門

長崎県知事賞（最優秀賞）	長崎県立長崎東中学校	門優帆	三年	……	64
長崎県教育委員会教育長賞	おばまの森放課後等デイサービス	岩崎穂乃香	一年	……	65
長崎県社会福祉協議会会長賞	佐世保市立福石中学校	富河花音	二年	……	66
長崎県身体障害者福祉協会連合会会長賞	佐世保市立日宇中学校	峯龍太郎	一年	……	67
長崎県手をつなぐ育成会会長賞	長崎県立長崎東中学校	本田結	三年	……	68
長崎県知的障がい者福祉協会会長賞	佐世保市立福石中学校	大石侑里果	二年	……	69
長崎県精神障害者家族連合会会長賞	佐世保市立福石中学校	田川莉房万	二年	……	70
長崎県精神障害者団体連合会代表賞	佐世保市立世知原中学校	白川風花	二年	……	71
長崎県身体障害児者施設協議会会長賞	佐世保市立福石中学校	湯川凜太郎	二年	……	72
佳作	おばまの森放課後等デイサービス	川内晴天	二年	……	73
佳作	長崎県立長崎東中学校	小林ひより	三年	……	74

◎小学生部門◎ 長 崎 県 知 事 賞 賞 (最優秀賞)



おばまの森放課後等デイサービスそら 矢崎 はるか 二年

◎小学生部門◎ 長崎県教育委員会教育長賞



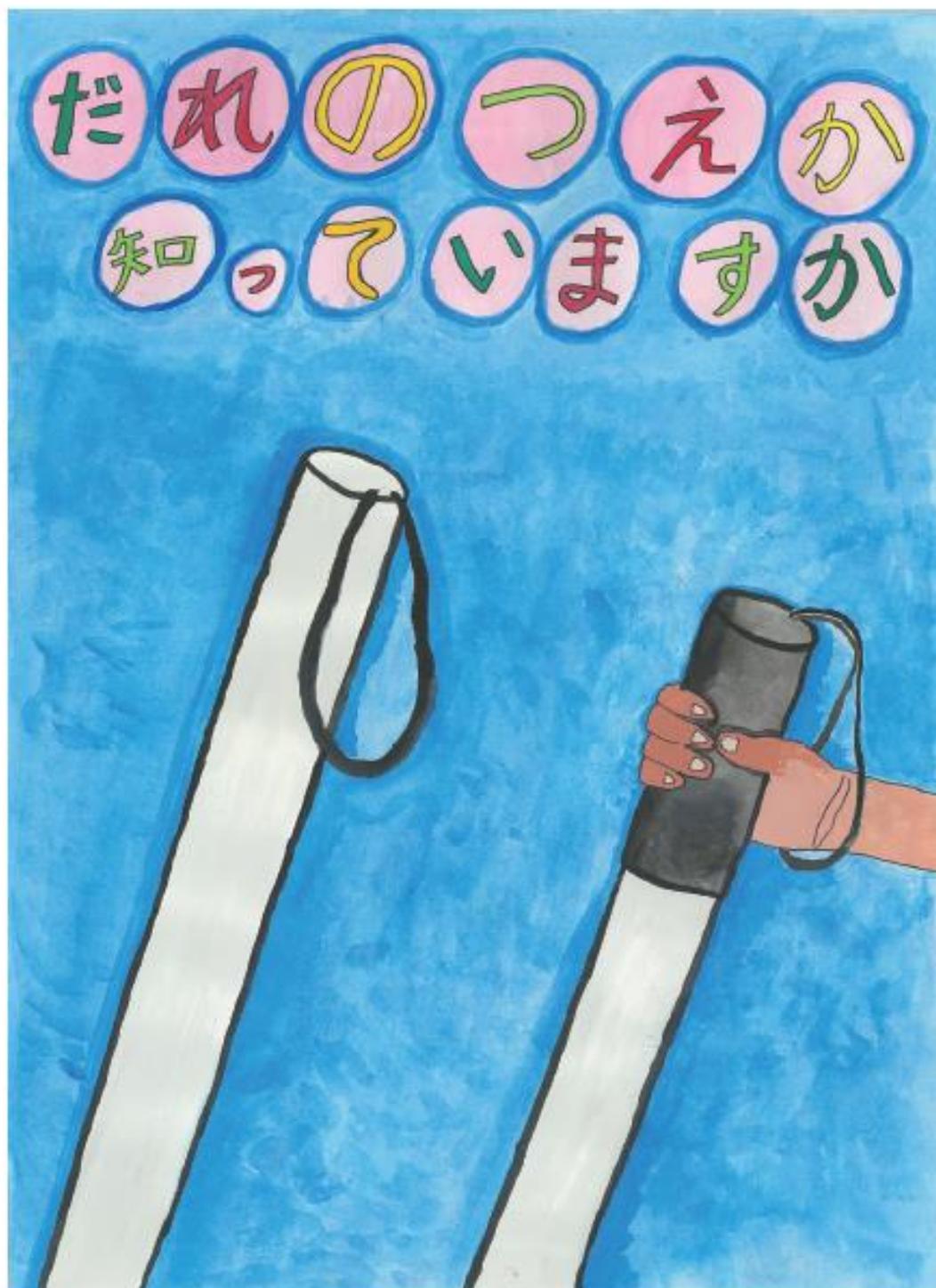
南島原市立南有馬小学校 本村恋奈 六年

◎小学生部門◎ 長崎県社会福祉協議会会長賞



おばまの森放課後等デイサービスそら いとうゆうせい 伊藤悠晴 一年

◎小学生部門◎ 長崎県身体障害者福祉協会連合会会長賞



五島市立本山小学校 アノノ 榎 タ 田 アリン 琳 四年

◎小学生部門◎ 長崎県手をつなぐ育成会会長賞



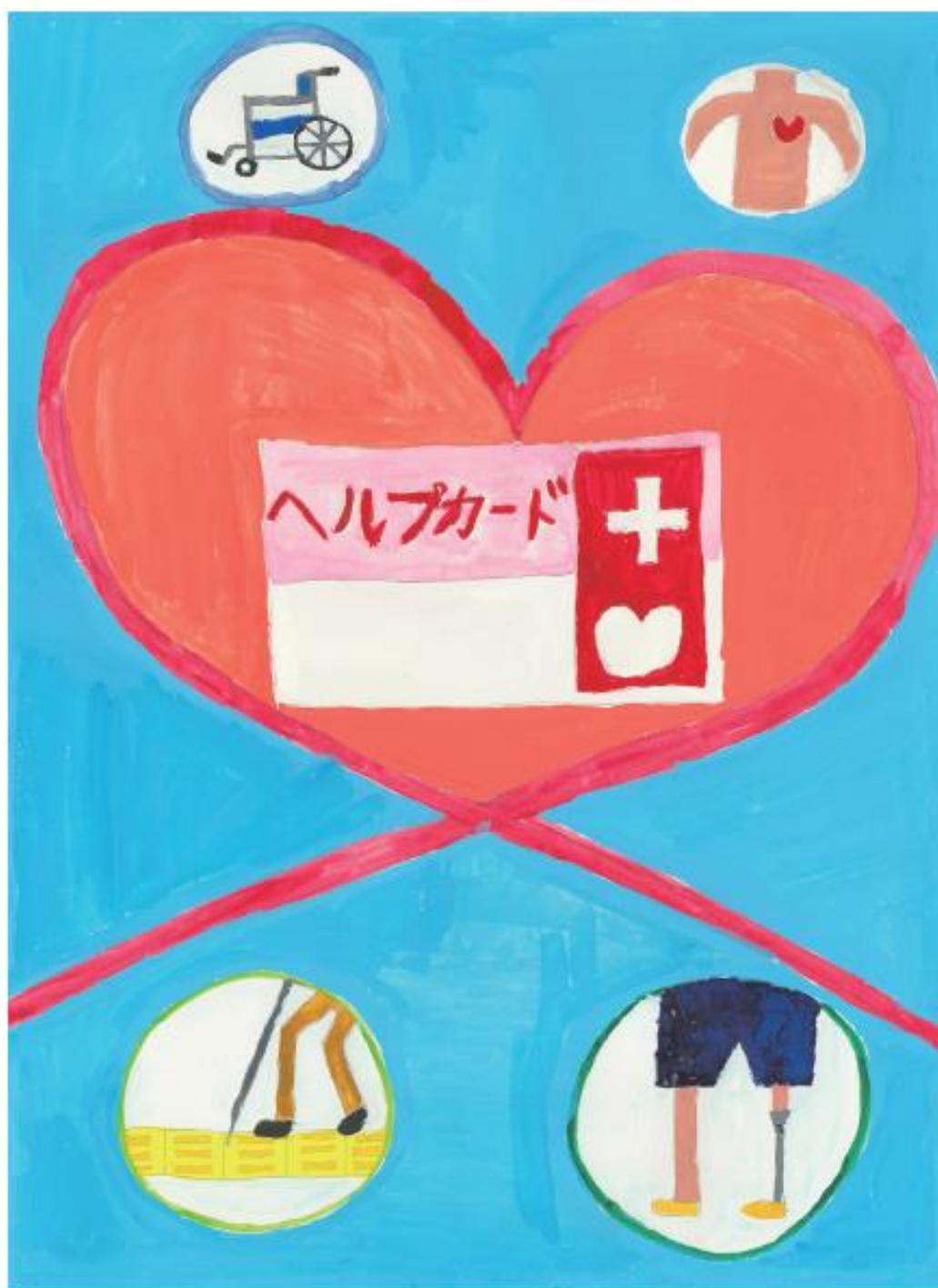
おばまの森放課後等デイサービスそら ば ば な お と
馬 場 直 人 五年

◎小学生部門◎ 長崎県知的障がい者福祉協会会長賞



おばまの森放課後等デイサービスそら ほんだほると 本多陽太 五年

◎小学生部門◎ 長崎県精神障害者家族連合会会長賞



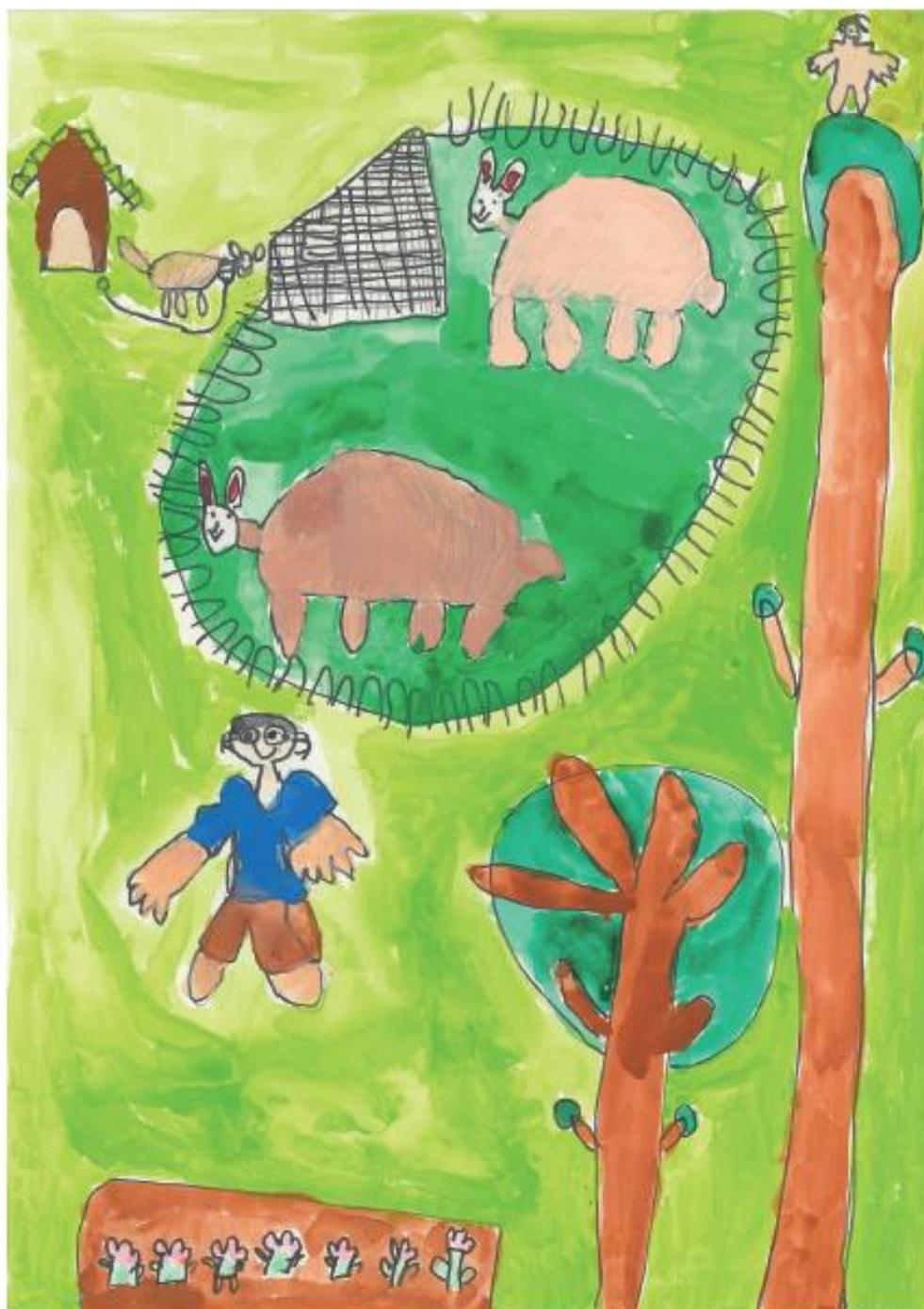
時津町立鳴鼓小学校 向井啓恭 四年

◎小学生部門◎ 長崎県精神障害者団体連合会代表賞

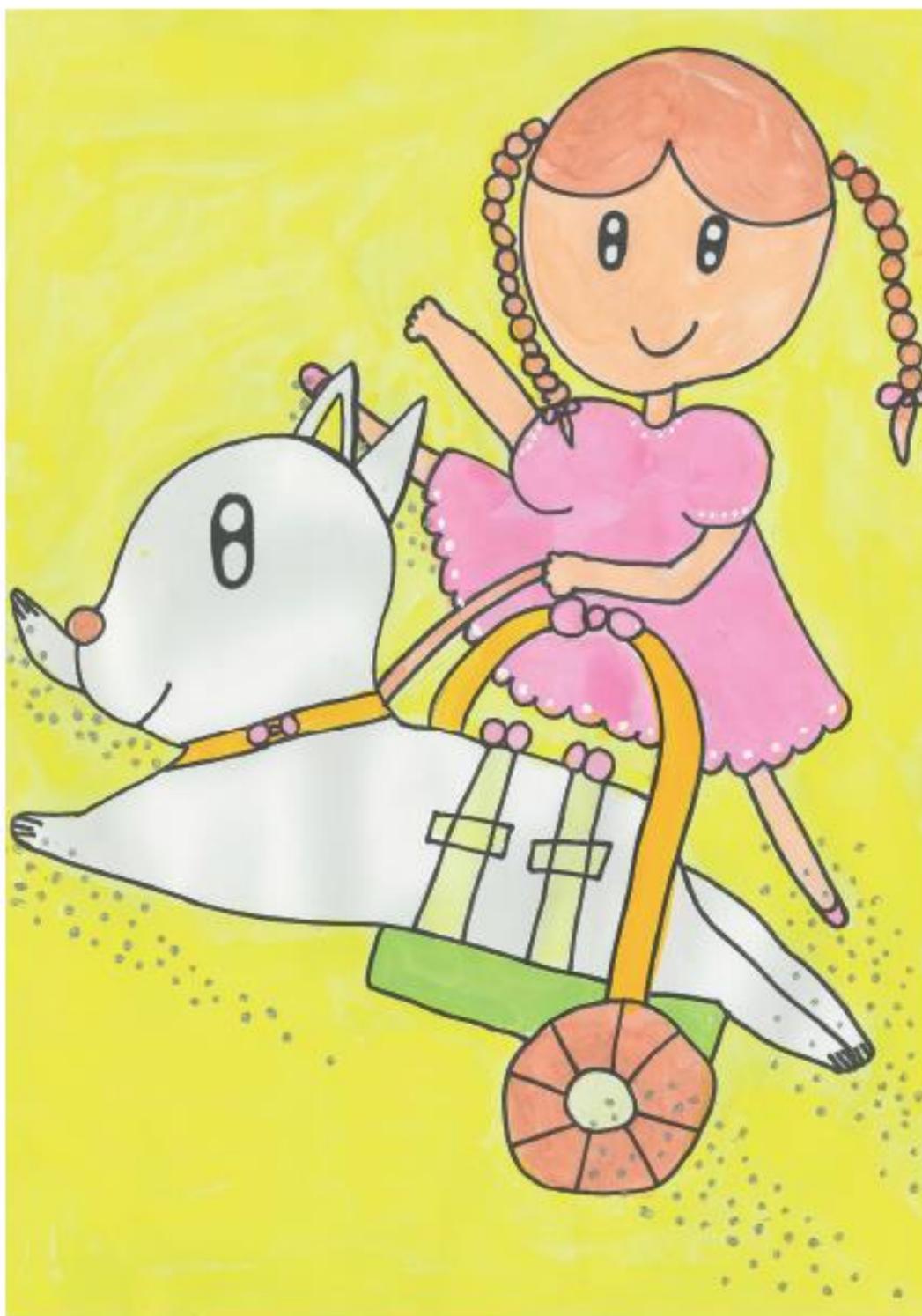


おばまの森放課後等デイサービスそら 木村ヒヨ 五年

◎小学生部門◎ 長崎県身体障害児者施設協議会会長賞



おばまの森放課後等デイサービスそら ば ば か と
馬 場 侑 人 五年



時津町立時津小学校 酒井優和 四年

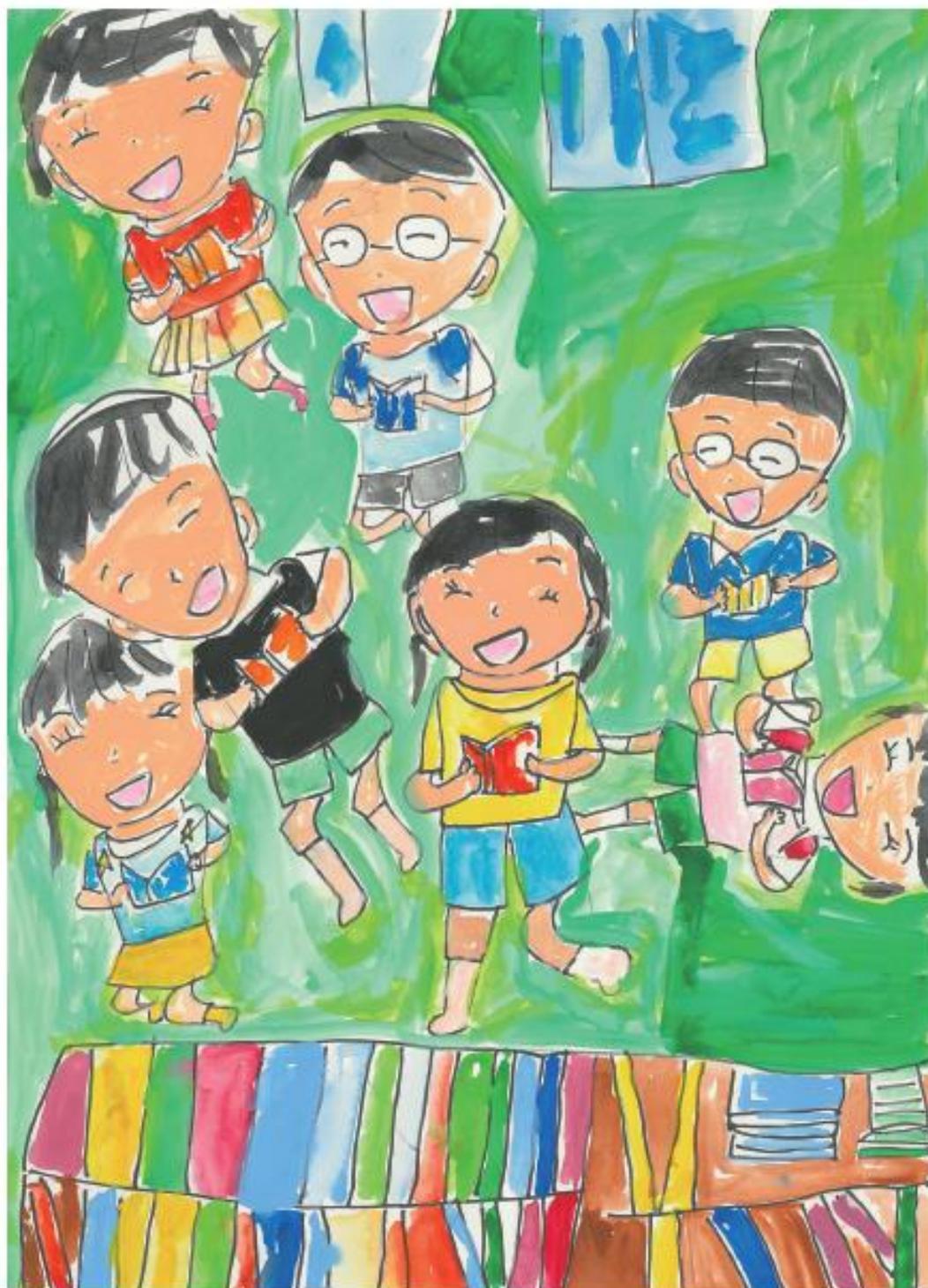


時津町立鳴鼓小学校 向井 姫菜乃 六年

◎中学生部門◎ 長 崎 県 知 事 賞 賞 (最優秀賞)



長崎県立長崎東中学校 かど 門 ゆう 優 ほ 帆 三年



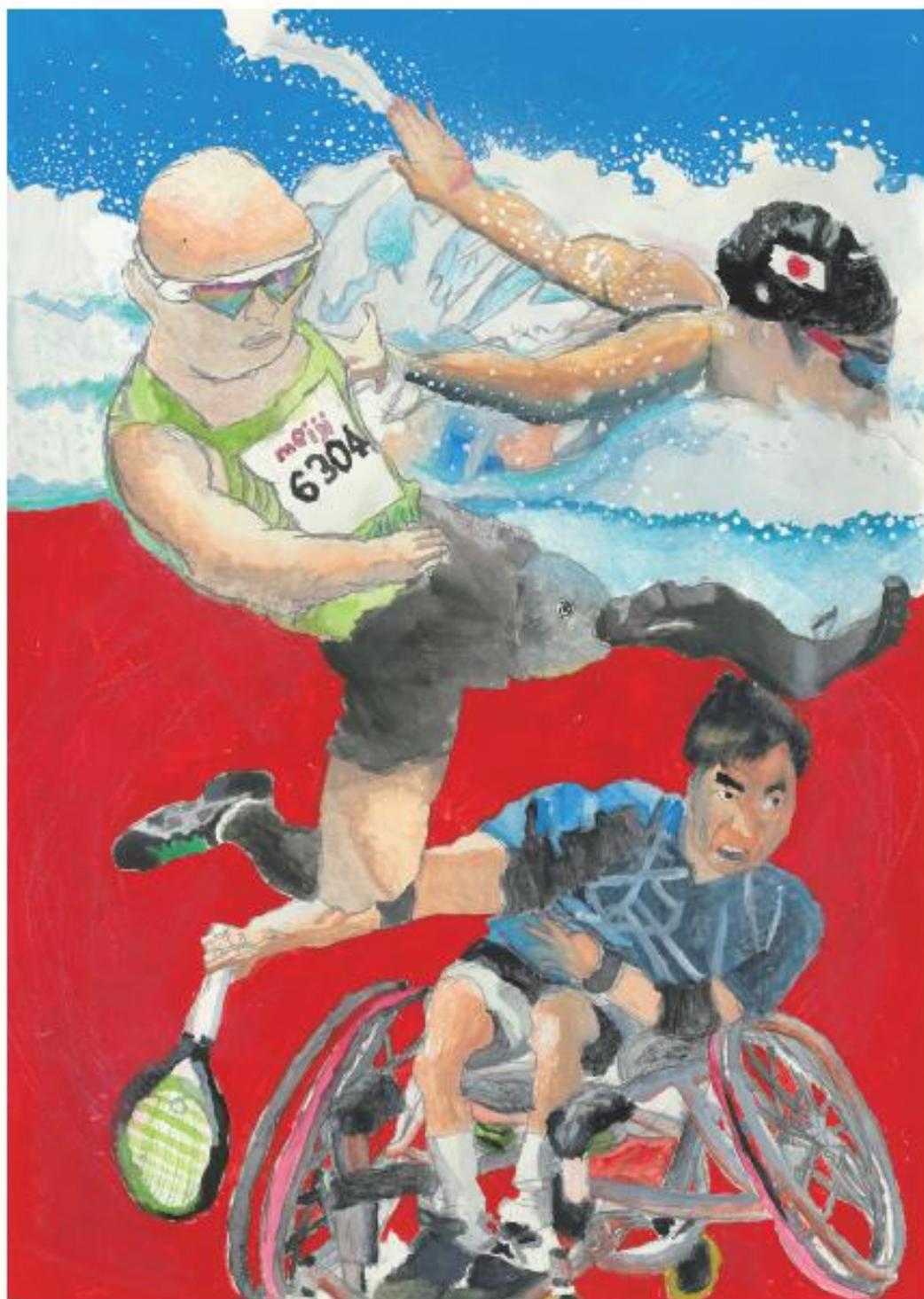
おばまの森放課後等デイサービスおおぞら いわ ぎき ほのか 岩崎穂乃香 一年



佐世保市立福石中学校

とみ かわ かのん
富 河 花 音 二年

◎中学生部門◎ 長崎県身体障害者福祉協会連合会会長賞



佐世保市立日宇中学校 みね 峯 りょうたろう 龍太郎 一年

◎中学生部門◎ 長崎県手をつなぐ育成会会長賞



長崎県立長崎東中学校 本田結 三年

◎中学生部門◎ 長崎県知的障がい者福祉協会会長賞



明るい
未来が
すぐそこに

佐世保市立福石中学校 大石 侑里果 二年



佐世保市立福石中学校 田川莉房 二年

◎中学生部門◎ 長崎県精神障害者団体連合会代表賞



佐世保市立世知原中学校 白川風花 二年

◎中学生部門◎ 長崎県身体障害児者施設協議会会長賞



佐世保市立福石中学校 湯川凛太郎 二年



おばまの森放課後等デイサービスおおぞら かわ うち は れ 川内晴天 二年

◎中学生部門◎ 佳 作



長崎県立長崎東中学校 こばやし 小林 ひより 三年

編集後記

本県では、障害のある人に対しての理解を促進するための施策の一環として、毎年「心の輪を広げる体験作文」と「障害者週間のポスター」募集を行っておりますが、本年度は、作文に九十三編、ポスターに五十五点のご応募をいただき、厳正な審査の結果、応募作品の中から作文については小学生、中学生、高校生、一般、ポスターについては小学生、中学生の各部門において、それぞれ受賞作品を選定いたしました。この作文・ポスター集は、これらの入賞作品計四十七編・点を収録したものです。

作文の中における表現については、障害に関する用語に係る不適当な表現の有無について留意しておりますが、「心の輪を広げる体験作文」は、「出会い、ふれあい」の体験を前向きに捉えた作品であること等から、作者のご意向を損なわないようできる限り原文のとおり登載させていただきました。

収録された作品は、いずれも、障害のある人の日々の思いや障害のある人に対する優しさ、思いやりが込められたものばかりで、この作文・ポスター集が、学校、職場、地域など様々な場において多くの方々にご覧いただき、障害や障害のある人に対する理解が深まり、相互理解が一層推進されることを期待しております。

結びに、この作文・ポスター集の編集にあたり多大のご協力をいただきました関係者の皆様方に対し、厚くお礼申し上げます。

令和二年十二月

長崎県福祉保健部障害福祉課

令和2年長崎県障害者週間作文・ポスター集

出会い、ふれあい、心の輪

令和2年12月発行

編集・発行 長崎県福祉保健部障害福祉課

〒850-8570 長崎市尾上町3番1号

(電話) 095 (895) 2451

(FAX) 095 (823) 5082

この作品集は、長崎県愛の福祉基金を活用して作成しています。

【愛の福祉基金とは】

愛の福祉基金は、障害のある方々のため基金箱を設置いただき、愛の心と寄付金を集める運動として昭和47年11月2日から始まりました。

基金箱は、各学校、企業、その他各種団体に設置していただいています。

寄付金は、長崎県愛の福祉基金として積み立てられ、障害者の芸術活動やスポーツの振興等、県内の様々な障害者の福祉の推進に活用しています。

愛の基金は、障害をもつ人や家族、又、サポートするボランティアの方々にとって多くの希望や勇気、可能性へとつながっています。

また、愛の福祉基金では、基金箱の寄付以外にも、一般寄付を受付けています。

あなたの善意を愛の基金箱に！



<基金箱製作協力>

長崎慈光園

陶器デザイナー 森正洋氏

長崎県窯業技術センター

あなたのお店に、あなたの職場に備えてください。

障害者に関するマークについて

街で見かける障害者に関するマークには、主に次のようなものがあります。

皆さまのご理解とご協力をお願いします。

障害者のための国際シンボルマーク



障害者が利用できる建物、施設であることを明確に表すための世界共通のシンボルマークです。マークの使用については国際リハビリテーション協会の「使用指針」により定められています。※このマークは「すべての障害者を対象としたものです。特に車椅子を利用する障害者を限定し、使用されるものではありません。

ヘルプマーク



外見から分からなくても援助や配慮を必要としている方々が、周囲の方に配慮を必要としていることを知らせることで、援助を得やすくするよう作成されたマークです。(JIS規格)

ヘルプマークを身につけた方を見かけた場合は、電車・バス内で席をゆずる、困っているようであれば声をかける等、思いやりのある行動をお願いします。

盲人のためのシンボルマーク



世界盲人連合で1984年に制定された視覚障害のある人のための世界共通のマークです。視覚障害のある人の安全やバリアフリーに考慮された建物、設備、機器などに付けられています。信号機や国際点字郵便物・書籍などで身近に見かけるマークです。

耳マーク



聞こえが不自由なことを表す、国内で使用されているマークです。聴覚障害のある方は見た目には分からないために、誤解されたり、不利益をこうむったり、社会生活上で不安が少なくありません。このマークを掲示された場合は、相手が「聞こえない・聞こえにくい」ことを理解し、コミュニケーションの方法に配慮をする必要があります。

ほじょ犬マーク



身体障害者補助犬法の啓発のためのマークです。身体障害者補助犬とは、盲導犬、介助犬、聴導犬のことを言います。「身体障害者補助犬法」により、公共の施設や交通機関はもちろん、デパートやスーパー、ホテル、レストランなどの民間施設では、身体障害のある人が身体障害者補助犬を同伴するのを受け入れる義務があります。

オストメイトマーク



人工肛門・人工膀胱を造設している人（オストメイト）のための設備があることを表しています。オストメイト対応のトイレの入ロ・案内誘導プレートに表示されています。このマークを見かけた場合には、そのトイレがオストメイトに配慮されたトイレであることについて、ご理解、ご協力をお願いします。

ハートプラスマーク



「身体内部に障害がある人」を表しています。身体内部（心臓、呼吸機能、じん臓、膀胱・直腸、小腸、免疫機能）に障害がある方は外見からは分かりにくいので、様々な誤解を受けることがあります。このマークを着用している方を見かけた場合には、内部障害への配慮についてご理解、ご協力をお願いします。

「白杖SOSシグナル」普及啓発シンボルマーク



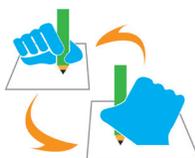
白杖を頭上50cm程度に掲げてSOSのシグナルを示している視覚に障害のある人を見かけたら、進んで声をかけて支援しようという「白杖SOSシグナル運動」の普及啓発シンボルマークです。白杖によるSOSのシグナルを見かけたら、進んで声をかけ、困っていることなどを聞き、サポートをしてください。

手話マーク



手話を必要としている人を対象としています。5本指で「手話」を表す形を採用し、輪っかけて手の動きを表現しています。ろう者等からの提示は「手話で対応をお願いします」の意味です。窓口等での掲示は「手話で対応します」、「手話でコミュニケーションできる人がいます」等の意味です。

筆談マーク



筆談を必要としている人を対象としています。相互に紙に書くことによるコミュニケーションを表現しています。当事者等からの提示は「筆談で対応をお願いします」の意味です。窓口等での掲示は「筆談で対応します」の意味です。